

雨森芳洲著『交隣提醒』（現代語訳）—その3

オー
呉

マン
満

0. はじめに

近年、日韓及び韓日間での関係史分野における研究は多くの発展を見せている。このことは、その間、この分野の研究者の増加や研究成果の質的水準の向上があろう。しかし、広義には相互の関係史研究の全般的な現況は今までの成果よりは今後扱わねばならない問題のほうが多い。

ところで筆者は、日韓関係史分野とりわけ朝鮮通信使に関わる研究が日韓双方で話題になり、優れた先学者の研究成果が現れたころ、対馬藩儒雨森芳洲の思想と業績に注目し、1997年より、「雨森芳洲と善隣外交」、「雨森芳洲の朝鮮語研究」に関する論考を発表してきた。そして、近世の日韓関係史とりわけ日韓外交史の分野で活躍した雨森芳洲著『交隣提醒』に鋭意、関心を払ってきた。

雨森芳洲著『交隣提醒』については、筆者の“雨森芳洲著『交隣提醒』について—その1”（大阪経済法科大学論集第90号、2006年2月刊）および“雨森芳洲著『交隣提醒』（韓国立国史編纂委員会所蔵本）について—その2”（大阪経済法科大学論集第92号、2007年2月刊）を参照されたい。第90号では、著者雨森芳洲について、と解題『交隣提醒』について、を詳述した。また、第92号では、解題『交隣提醒』（韓国立国史編纂委員会所蔵本）と題して、を詳述した。

『交隣提醒』は、1728年（享保13）、雨森芳洲が61歳の時に対馬藩主宗義誠に献じた朝鮮外交の心得書で、格調高い内容を有する芳洲の代表著作の一つである。現在、高月町立観音の里歴史民俗資料館に保管されている芳洲会所有の『交隣提醒』は、あまたの雨森芳洲関係資料の中、重要文化財に指定されている。

ところで、現在伝えられている『交隣提醒』には5種の異本 ①滋賀県高月町の「雨森芳洲文庫所蔵本」②「東京大学史料編纂所所蔵本」③対馬の旧厳原

町の「中央公民館所蔵本」④韓国の「韓国立国史編纂委員会所蔵本」⑤「韓国国立中央博物館所蔵本」）が伝わる。

本稿は、韓国立国史編纂委員会所蔵本の『交隣提醒』を底本として現代日本語訳に努めたものである。底本とした『交隣提醒』の影印は「大阪経済法科大学論集第92号」で掲載した。現代日本語訳出の過程で、本稿が底本とした『交隣提醒』と芳洲文庫所蔵本の『交隣提醒』とは内容的に見て、記述法、漢字表記、単語など、大小の相違があることが判明した。

なお、韓国立編纂委員会所蔵本『交隣提醒』の入手過程および他の異本との相違については、前号（第92号）で記述したので省略する。

[凡例]

1) 符号

（ ）：筆者（呉）が現代語訳上、理解の説明を補足した場合。

『 』：原文に現れる書籍を表す場合。

「 」：引用文または文中における漢字用語を表した場合。

2) 他の留意事項

- ①底文には、各番号と題目が付されていない。本稿では内容を理解するために全体を54項目に分け、項目ごとに番号をつけ、題目を付した。
- ②底文では各項目内で分段が分かれているわけではないが、本稿では内容の理解のために分段の区分を行なった。
- ③数字は、原文では漢数字であるが、漢数字の後に（ ）内にアラビア数字を付した。しかし、注釈ではアラビア数字に統一した。
- ④底本に表われる歴史上の用語や古典から引用した語句などに対しては、読者の理解のために註釈に説明を付した。
- ⑤底文に表われる人名や地名などの固有名詞は基本的にルビを付した。その際、日本人名にはひらがなで、当時の朝鮮人にはカタカナで読みのルビを付した。
- ⑥人名、地名、官職名などの固有名詞と一般に広く知られていない用語などについては読みにルビを付した。
- ⑦注釈で明らかにしない参考文献は最後の部分に一括して提示した。

3) 用語と文体

- ①執筆者(雨森芳洲)の意図が読者に理解されるようにするために、基本的に原文を忠実に現代語訳したが、理解の手助けのために意識をした場合もある。
- ②当初、朝鮮語と日本語の通訳を担当していた人々の中で、朝鮮人通訳官は訳官として、そして日本人の通訳官は通詞として互いに区分していたが本稿では原文の区分のままに従った。
- ③原文と本稿の中で表われる「朝廷」は、大部分の場合、朝鮮時代の朝廷を指す。

『交隣提醒』

1. 朝鮮との交際に留意すべきこと

朝鮮との交際については、第一に、人情と時勢、すなわち風俗や慣習を知ることが重要である。その中でも(朝鮮政府機構の)筋道にしたがい区分し、何事であれ判断しなければならない。筋というのは、これは朝廷の判断に関わること、これは東萊府^①の判断に任せること、これは訳官たちが取りさばくこと、これは商人たちのしきたりによること、とそれぞれに分けて熟考した後、それに応じてふさわしいと思われるように処理することを「筋々に分ける」と言うのである。

例えば、(朝鮮から)米を買い入れる件、(朝鮮が対馬藩からの役人を朝鮮側がもてなす)宴席などの件は、両国の誠実な関係を図る観点から約定を取り決め、朝鮮の朝廷にも知られているとのことですから、米が快く搬入されるかどうか、または、宴席が例式どおり行なわれるかどうかは朝廷と東萊府の判断に属することである。また、商売^②に関することは、利益があり、交渉がうまくいけば荷物を持ってきて、交渉(合意)がうまくなされなければ荷物を持ってこない、というように、専ら商人の仕方(作法)によることなのである。ところが、米の買い入れ、または宴席の件に関して、必ず主張しておかねばならないことでも商売に差し支えるのではないかと考え、(対馬藩が)これを主張す

るとか、または、商品の納入のおり、不足があったり、納期が異なると（商人たちに話さないで）東萊に言いつけて何とか商売が順調にはかどるように考えたりするのは、筋を分けない考え違いと言うものである。以前、偽船^③が問題になったことがあったが、最初は（対馬側も）厳しく朝鮮側を追及するようにとの考えのように見受けられたが、その後、商売に差し支えたと裁判方^④から言ってきたので、そのことも大概に済ませてしまった。このような類のことを指して、筋の区別がなく、人情や社会のありさまに疎い^{うと}というのである。だいたい日本のことであれば、これは商人に言うこと、これは町奉行に言うておくこと、これは老中方に申し入れること、と区別は自ずから分るものです。ところが、朝鮮のこととなると、乱れるので、そのような点にも心をいなければならぬ。

【注】

- ①朝鮮王朝時代に東萊（現、釜山タワーの近郊）に設置された官庁。
- ②主に「私貿易」すなわち「開市」のことを指す。私貿易に対し、「官貿易」は宗氏から朝鮮王へ物品を献上すると、回賜という形式で返礼の品物を受けるのに対し、私貿易は倭館内で自由に市日を決め取引を行なった。
- ③不法貿易船、蜜貿易のこと。
- ④裁判方とは、朝鮮通信使の送迎、訳官使の送迎、公作米の交渉などを担った役職。

2. 特許商人たちによる私貿易

商売のことは、商人の数を定めて貴国（対馬）と貿易をするように朝鮮朝廷が許可したのである^①。だから商人については、何を要求するとか、または「別開市」^②を要求するとか、あるいは人参の取引で商い、暮らしを立てるなどは全て朝廷が禁止しているので邪^{よこし}まなことがないように、との示達を格別に留意しなければならない。だから、交易する物資をもっと多く持ってくるように指示を下されるように（朝鮮側や東萊府に）願うのはたいへん無益なことである。もちろん朝鮮の商人たちとの合作がよくなされれば明らかに刑罰を受ける

ことになるが、潜商^{やから}③の輩がいまだに途切れません。このように考えると、朝鮮側とうまく合意なされない状態では、いくら朝廷と東萊府から命令が下っても利益のない商売をすることができない。商売の取引（私貿易）は朝廷や東萊府が関わるのではない、とも言えない事情があるのである。この点はやはり混乱を招きやすいのでご理解くださらねばならない。

【注】

- ①朝鮮の朝廷が商人の数を20名、30名などと定めることがあり、これを指して「商売定額制」と言う。
- ②毎月3、8、13、18、23、38日の開市日以外に開かれる私貿易のこと。
- ③朝鮮の朝廷の許可を受けない民間商人が日本側と貿易するとか、許可を受けた商人または訳官でも監督官の目を避けて日本側と闇取引することを「潜商」と言い、厳しい罰を受けた。一方、日本側も対馬藩の統制をくらし朝鮮人と取引するのを厳しく規制した。

3. 穀物支給の中止と撤供撤市

対馬への供給を停止し、貿易を廃止してしまえば、対馬の住人は乳飲み子の乳を絶つと同じであると、かの国の人はいつも言っており、こちら（対馬）に痛手を与えることを上策と考えている。小川又三郎^①が倭館^②主の時、館内の者が銀奉^{ウンボン}という朝鮮人を殺して、中川に沈めておいたのを朝鮮人たちがその死骸を取り出したことが東萊に聞こえ、もしその犯人を差し出さなければ撤供^{ていこう}撤市^{ていし}③するようにとの伝令を呉通訳官が懐に持っており見せてくれた。

この時は、通訳官から言い出さないうちに館内からこの件の犯人のことを申し出る者がいた。早速、館守が召し捕えたので、右の伝令を出すまでには至らなかった。今後においても御国（対馬）からけしからぬことを命令したり、無作法な対処の仕方をした時は、確かに商売の差し支えになることが起こるでしょうが、言うべきことをおっしゃることには無理に撤供撤市するようなことはない。日本人というのは、商売を命のごとく最も大切にすることを（朝鮮人側）もよく承知しているので、時には訳官たちが諮って貿易が円滑にはかどら

ないようにすることがあっても、このような時には、前にも申したとおり、筋を分かち、物事の大小・軽重を分別し、それでもなお市の開催に支障があるのかどうかを判断することが最も重要なのである。

【注】

- ①彼は、1703～1704年（元禄16～宝永元）間、倭館の館守であった。
- ②中世時代、東アジアの国家の外交は使臣の相互往来にみならず、相手国に常駐しないことが慣例であった、しかし、最小限の必要に応じて一定の地域に特別な空間を設け暮すことを許可していた。日本の長崎のオランダ商館、中国の福州と日本の鹿児島・琉球館、朝鮮の釜山の倭館がそれである。倭館とは、狭義では倭使が宿泊していた館舎を意味するが、広義では制限された地域に日本人を居住させ、倭使の接待と貿易を許可させた地域を指す。元来、倭館を設置した理由は高麗末以来、沿海岸を略奪した倭寇を平和的な交易者に転向させようとした懐柔策にあった。そのためには九州地方の有力封建領主と対馬島主に貿易上の特権を与え倭寇の取り締まりを任せることであった。ところが、貿易の渡来倭人の増加で任意に浦口に渡来する者が増えることによって国家機密の漏洩と弊害を防ぐ必要があった。そのための方策が倭館の設置であった。当初は厳格な規制を設け、許可なしには倭館外への出入を禁じた。

1407年、富山浦（東萊釜山）と乃而浦（薺浦・鎮海・熊川）に初めて設置された後、1418年に鹽浦が追加された。この三つの倭館を「三浦倭館」という。ところで1592年に起こった「壬辰倭乱」（文禄の役）で国交が断絶し、国交の論議がされる中、漢城（現、ソウル）にあった日本施設の東平館も閉鎖され釜山が唯一の外交・貿易の窓口となった。

1607～1678年まで存続していた倭館を「豆毛浦倭館」（釜山の東区庁付近にあった）といい、規模は1万坪ほどであった。この倭館は釜山镇城に近く、船艙の水深が浅く環境がよくないとのことで、現、竜頭山公園近くに移転した。この三番目の新しい倭館が「草梁倭館」であり、1678～1876年まで存続した。規模は約10万坪（長崎の出島の約25倍）で、豆毛浦倭館の10倍であった。「草梁倭館」は竜頭山付近を中心に東館と西館に分かれており、東館は

外交と貿易を担当する居住業務の空間で、西館は日本の使節が宿泊する空間であった。「草梁倭館」には常時、500人ほどの日本人が居住していた。

- ③市場撤廃のこと。すなわち、ここでは対馬への供給を廃止し、貿易を廃止すること。

4. 公作米の支給遅延

朝鮮からの買米^①について話そうと思う。朝廷では別段これといったことはありませぬが、東萊府や訳官たちが諮り、中間で米の支給を遅らせたことがよくある。利益を貪るのは華^②もみな同じである。廉明（^{ことわり}理の明い役人）がいつもいるわけではないので、この点に注意しなければならない。

【注】

- ①ここで言う「買米」の「米」とは、「公木」（国家や役所所有または公貿易に用いる木綿^{もめん}）の代わりに支給する「米」という意味である。朝鮮時代に、日本との公貿易で支払う物品の値を木綿で換算することを「公作木」と称し、米で換算することを「公作米」と称した。「買米」と表記する時は、朝鮮から「買っていく米」という意味が盛り込まれていると考えられる。
- ②「華」に「みやこ」のルビがある。なお、東京大学史料編纂所蔵本『交隣提醒』（以下、「東大所蔵本」と称する）では、本史料の「華も同前」を「華夷^{クワ}同然」と記されている。

5. 公作米の品質と度量衡

朝鮮から購入した米に砂や石、^{もみ}粉類を混ぜたり、水に浸して持ってくるのは、専ら釜山の役人（監官^{カンクワン}等牌）^①の仕業だと聞いた。これから先、またこのようなことが起これば、宴享を催す時、倭館内の役人たちと合意し、その米を俵のまま東萊府使の前に差出し訴えるのが最善の方策だと考える。

倭館内から米を受け取る時、一斗以外に小升をさらにもらうのは昔からそうしてきたものと思われる。しかし、その理由は確かではない。「東萊府使が加

升せよ、と主張して段々とそのようなやり方に変わった」と担当者も話を聞いているが、「加升せよ」と言う時、論争して一方が負けるおそれがある。それで最後まで意見を制したことがなかった。斛升についてもおよそその内幕を把握して『斛一件記録』に詳しく記しておいた。^②将来、加升の前後の内部事情がさらに明らかになれば、その時は上記のように、東萊府に直接訴える方法を取らなければならない筈である。

【注】

- ①東大所蔵本には、本史料本とは異なり、「公作米西館米」とは記さず「監官等牌之西館米(続いて二文字不明)」と記している。このことから「釜山役人」と称する朝鮮の官吏は公務役における対日輸入品の代価として日本に支給した公作米の業務担当者だったと思われる。東大所蔵本には、本史料とは異なり「等牌」すぐ横に小文字で、「西館米」と記されている。
- ②現在、長崎県立対馬歴史民俗資料館宗家文庫に所蔵されている文書番号が「記録類朝鮮方B1」(『宗家文庫史料目録(記録類Ⅱ)373頁参照』)には、当時、倭館の建物は大きく東西に分かれていた。東館には、館守倭家・裁判倭家・開市大庁などがあったこと、そして、西館には、第一船送使が留まる東大庁と参判使が留まる西大庁などがあったことが記録されている。このことから、「西館米」とは、朝鮮が対馬から来た日本の使臣に支給していた米を指すものと考えられ、この業務を担当していた朝鮮の官吏が「等牌」であった。

6. 送使と使者の区分

送使で行くのは、貿易のために行くものであることを知らねばならない。朝鮮の文書には商船となっている。送使^①以外に特別な用務があって行くのは「使者」と言う。送使として行く人々の中の大部分は何の用で行くのか分らず、ただ接待を受けに行くと考える輩がいるが、嘆かわしいことである。幕府に対しては前々より両国の誠信の意味で、一年に船25隻ずつを送ると報告されているだけで、商船とは報告されていない。したがって、幕府が詳しく問わなければ対馬藩から商船と報告してはならない筈である。

【注】

①外国に使臣を送ること。またはその使臣。

7. 兼帯送使

兼帯^①送使のことは、朝鮮の隠密な約束として幕府に知られることではない。しかし、幕府で尋ねられれば、朝鮮での願どおりしただけであり、弊害を省くため数十年間、兼帯してきたものと報告すれば何ら問題はないであろう。対馬藩に漂流した漂船を兼帯して送還するのも同然のことである。ただこのようなことは義理に合ったことではないので、公明正大な人君が出現すれば必ずや改まりましょう。

【注】

①「兼帯」とは、もと二種以上の職務を兼ねることで、対馬から渡航してくる使送船の接待および交易方法を簡素化するために実施した制度である。1635年に馬上才として派遣された洪喜男によって約条され1637年から実施された。その内容を見れば、対馬島主年例送使20隻に対し、使船ごと正官が乗船し、彼らに対する接待が行なわれたが、これを1等送に対して2等送と3等船に兼ねて接待させ、第4船からは5船以下、17船まで兼ねて接待した。そうすることによって正官が乗船する船は歳遣第2船、歳遣3船、歳遣4船、第1特送船など、5隻で15隻分に節減された。

8. 日本側信使に対する朝鮮の接待

中国人が日本に商売で来ると言っても、糧米と柴炭をやって接待^①することはない。ところで貿易のため日本が朝鮮に派遣した送使を朝鮮側が接待するのは中国の例に従ったものである。例えば、胡人が開市^②のために中国に行けば、「遠方より来た人を慰労する」といって中国側が駄馬を与え食糧を具えてやるのが『宋史』にも記録されているが、朝鮮もその例に従ったのである。これは、朝鮮としては寛大な措置であるが、対馬藩としては精神的に安らかなこと

ではない。

【注】

- ①年例 8 送使の場合、各々倭館に滞留できる留館日 (例えば、歳遣第 1 船送使 85 日、第 1 特送使 110 日など) が定まっている。これらについては、滞留期間中 5 日に一度ずつ「五日雑物」という食糧支給の規定があったし、各種の宴会および接待規定をつくり厚くもてなした。
- ②私貿易のこと。

9. 対馬の人々に対する朝鮮での接待

対馬に渡船した人々は定められた日数の接待を受けるだけでなく (定められた日数を超えれば) 規定にない日数の接待まで受けようとする。朝鮮でいろいろとしなければならないことがあると言いつつ (そのまま滞留を続けて) 規定日数内に (日本へ) 帰国した人はいないようだ。こんな状態を決して許してはならない。止むをえないことで (途中) 帰国する場合、必ず滞在した日数の接待だけ受けさせ、それ以外には接待が受けられないよう命令する必要がある。このように指摘したことがあると、朝鮮では (妙に) 考える。(また対馬の) 幹部の中に、定められた日数内に帰らなければならないと考える人もその中にはいる。対馬の人々がよくない印象を残し、朝鮮人が、対馬の人は礼節が正しくないと考えようになれば対馬島主が悪評を聞くことになるが、そんなことも悟ることができないから寒心に耐えない。三十年前 (1700 年頃) からは、そのような悪弊が見られなくなったが、それ以前までは対馬藩士たちの給料不足を埋めるためにと称しながら、(派遣する必要のない) 別使^①を派遣し、そのつど、論争を繰り返したことがある。結局、島主のためにもよくない。

【注】

- ①特別な使臣。

10. 日本人に対する朝鮮通詞の勤務地接近を禁止

送使・僉官が、「坂の下^①」にある通詞宅にむやみに行くことはよくないことなので禁止しなければならない。

【注】

- ①一説によれば、「坂の下」は現在の釜山広域市中区瀛州洞一帯に当たる地という。

11. 通詞の機能と重要性

朝鮮の倭館に勤める対馬藩の官吏の中で館守・裁判・一代官はもちろん、重要な役割を担っている。その外、交隣^①と関わっては通詞^②ほど重要なものはない。通詞は言語さえよくできればそれでよいと言う人もいるにはいるが、全くそうではない。人柄も優れ、才覚もあり義理を弁えることを知り、島主のことを大切に思う人でなければ、真に島主のための職務を遂行できる通詞とは言えない。(そのような通詞でなければ) かえって害となり、利益とはならないであろう。したがって、通詞を選択する時はある程度人格を具えた人を選ぶのが肝要である。さらに今日のように、通詞に対する報酬が貧弱では何の助けにもならないであろう。通詞がどれほど重要な官吏であるかは一言では全てを説明することはできない。

【注】

- ①「交隣」とは、隣国および隣人と交わること。
②「通詞^{つうじ}」とは、二国間の言語の中間に立って言語の解釈をする人のこと。
「通事^{つうじ}」とも称した。通訳人。

12. 両国の中間で交渉する通訳の役割

通詞が(中間で)交渉する時、(朝鮮側の)訳官^①たちと中間で意見の調節をする場合、人によっては、*何の話しをしているんだい? こちらの話しをそ

のままあちらに伝え、あちらの話をこちらにそのとおりに伝えればいいはずなのに、どうしても納得がいかない’と疑わしく思う人がいる。通詞たちが中間で意見の調整をすることによって、勿論よくない場合もあるだろうが、事案によっては、よく解決される場合もあるので一律的に疑うこともない。このようなことは人情および状況の雰囲気などを考慮する人ならば自ずと知りえることである。

例えば、正徳通信使が日本に行った時、使信一行に、何日かに、‘道中を発つ’ (首途) と伝えたのに、三使^②たちはこれをその日に出船するものと聞き及び、すぐ船出するつもりでいるものと聞いた。これに、その日は出立^{しゅったつ}すると言えはよく、船出まではまだ時間的余裕があることを知らせたことがある。そうしたところ、かえって説得されて、必ず船出しなければならないと主張するのであった。裁判・通詞を通じて、そうではないと論^{さと}しても聞き入れられず、その前日、対馬藩の用心担当者を送っても快諾はなかった。夕刻になると、上々官が官署に参り船出を知らせに來たし、仁位孫右衛門^{に いまごう えもん}がこのことを報告すると、‘何卒、明日船出できれば’と懇切に願い出る話しぶりのように聞こえた。それで、私、東五郎^③が言うに、「以前より信使は万事を対馬太守に任せたことはなく、この度の信使も先ほど朝鮮へ出発する件について、彼らを護行する使者に煩わされていない。特に、信使たちが留まる宿所の雰囲気を見ると、早朝から順々に鍋から釜まで船に載せていく態勢であり、少し前、口頭で知らせに來たのは、とても懇ろに願い出るなどの話ぶりではなく、必ず明日船出するので、そのように知ってほしいとの話振りと言えます。懇ろに臨む^{ねんご}ように理解し、対馬側が容易に返答してくださり、明日、直ちに船出するようになれば島主に対する判断も悪くなります。それゆえ通詞を呼び、三使が言った言葉を率直に申し上げるように指示するのがよろしかろうと思います」と言って、山城弥左衛門が呼ばれてきました。そうして、私、東五郎が弥左衛門に申し上げるに「皆の衆に指示したことが誤りなければよかろうと大切に思い、中間でよろしく取り繕っております。勿論、当然そのようにしなければなりません。今日のことは大変大切なことですので、上々官が言われた趣旨を速慮しないでそのまま申し上げなければなりません」と述べた。そのように述べたところ、

上々官が遣した三使がおっしゃるに、「船長たちが順風だと言うので。明日は遂に船出いたすつもりである。それで島主には、後ほど準備されしだい船出いたすとの趣旨でございます」と述べた。これに、その時から驚きはじめ、対馬藩士たちが皆、その日の夜中に長寿院^①に集まり、早朝早く三使が無理に船出する場合、それを中止せよ、と仰せ付けられた。このようなことは、通詞の意見を聞くといってもよく判断しなければならないことです。

このほか送使・^{せんかん}僉官が朝鮮の事勢を知りえず、とんでもないことを訳官に話す時、中間で支障なきよう通詞がこれをよく取り扱う場合もある。また、訳官たちが要求するように送使・僉官がいち早く回答しがたいことだと考えられる時は、訳官たちを暫らく落ち着かせ、適当な時に僉送使・僉官に述べ、その場の雰囲気調節したりする。このようなことにまでも、とにかく通詞がいなくてはならない重要な役人である。

【注】

- ①通訳に従事した官吏。朝鮮時代、外国語に精通した人を選抜する科挙試験があった。
- ②「三使」とは、朝鮮時代、日本に派遣された通信使の正使・副使・従事官のこと。
- ③「東五郎」は、雨森芳洲の^{あざな}字の一つ。ほかに伯陽の字がある、仕官後は、通称、籐五郎および東五郎、または東とも称した。また、朝鮮では一般的に姓は一字、名は二字であるところから、雨森東とも称した。
- ④1588年に創建された臨済宗系統の寺院で、対馬島厳原の^{ひよし}日吉にある。16代島主主義調の菩提寺であったと伝えられ、裏山にある墓地には雨森芳洲の墓がある。

13. 風習の相違による誤解

日本と朝鮮とは全ての面で風習が異なり、嗜好も異なる。ところで、このような点を考えられないまま日本の風習どおり朝鮮人と交際するようになれば、事によっては互いに合わない場合が多い。先に述べたように、何日「^{しこつ}首途」す

ると伝えた時も、日本では「首途」と「乗船」には違いがあるが、朝鮮には「首途」という語があるように思われぬ。特に、「首途」は‘道を発つ’という意味で記されている文字なので、文字から見ても「乗船」に関わるように見えるところから右のように、朝鮮と日本両国が互いに食い違ってしまったのである。だから享保の通信使^①の時は、日本側が「出船」の日付だけを朝鮮側に予め伝え「首途」という語は用いなかったのである。

これ以外にも、日本ではよいと思うことを朝鮮人はよくないものと理解し、よいと思わないことを朝鮮人はよいと思うことはいくらかでもある。したがって朝鮮側と交渉する人はそのような点に注意しなければならない。

朝鮮は専ら中華に学ぼうとする風習がありますが、書籍を通していても特別に中国のものでなければ納得しない。だから書籍を読んでも十に八、九までは朝鮮の風習も推察できるのである。とにかく学問がなければこれも不可能なことである。

日本では、高官の輿を曳く者が寒い冬にも袖をたぐって通う。また、槍を持ち主人に仕え行き来する下人や荷物持ちたちは似非ひげを付けて足拍子を取る。彼らはそれが間違いなく朝鮮人の目には立派に見えると思うでしょうが、実際はそうではない。朝鮮人は袖をたぐり上げるのを無礼だと考え、似非ひげをつけるのはおかしいことだと思ふのであり、足拍子を取る動作は苦勞を自嘲するおかしいことだと内心^{あざけ}嘲っているのである。

また、朝鮮人の考えでは、自分の家族や親戚の喪中に声を出して笑うのを日本人が見れば、それに同感するものと考えようが、かえって日本人はそれを嘲笑する。このように日本人と朝鮮人の間には互いに美德とすることが異なることを知らねばならない。

以前にあったことであるが、ある日本人が朝鮮の訳官に尋ねた。「国王の庭園には何を植えましたか」と尋ねると、朴僉知が答えて「麦を植えます」と言った。すると、日本人たちが「何とまあ！つまらぬ国であることよ」と拍手し、嘲笑したことがあった。おそらく朝鮮国王が庭園に花草類を全く植えるはずがなかろう、と思ったが（案の定）訳官がそのように答えたのはそのような意図からであつたろう。即ち「国王の御身でありながらも農事を忘れずおられ

る」と言えば、それは昔から君主の美徳になることであるから、おそらく日本人も同感するであろう、と考え先のように答えたであろうに、むしろ日本人の嘲笑を買ったのである。全てのことを処理する時、このような点を深く考慮しなければならない。

【注】

- ①享保四年(1719年)の第9次朝鮮通信使のこと。この時の正使は洪致中^{ホンチジュン}、副使は黄璫^{ファンゾン}、從事官は李明彦^{リミョンスン}、製述官は申維翰^{シンユハン}であり、来日の目的と理由は徳川吉宗の將軍襲職の祝賀であった。

14. 嗜好・風習の相違

日本と朝鮮は嗜好・風習が互いに異なるのに、日本の嗜好や風習を規準にして朝鮮人に関したことを把握しようとすれば、必ず判断違いを招くものである。考えが浅薄な者は江戸幕府に対するやり方で朝鮮に対処しなければならないと考える人もいるが、これは実におかしなことである。

五日次^{おいつり}①雑物などの支給を受ける時、日本人の口味で事の処理をするのは罪にならないと考えるが、自分に利得となることには当然人々は分別をわきまえねばならない。しかし、礼儀作法のことになれば、いつも日本の風習や方法で朝鮮関係のことを処理しようとするので、たまに判断違いを招くのである。

この他、朝鮮人がわざと喋らないのを見て、朝鮮人を愚かだと考え、朝鮮人が袖の長い着こなしであちらこちら歩き回るのを見て、朝鮮人を愚鈍で怠け者だと考える。また、訳官^{みだ}というのは、両国の中間に立つ役人なので、毎回双方の関係が円満に維持しようとの立場から虚言を述べたりするものであるが、それを見て、「朝鮮は嘘をつく国だ」と考えてしまう類は皆分別を弁えない考えなのである。朝鮮人がわざと妄りに言葉に表さないのは事物の前後を弁えた深い知恵と配慮からのものであって愚かなものとは見えないのである。

ましてや古今の書籍で伝える書伝にも深い知識を持っているので、取るに足らないつまらない人々であっても、思慮の浅い深いにおいても日本人がなかなか及ばないことである。袖の長い衣を着て仕事をするので、日本人のように敏

捷に働くように見えないが、一旦事が起こり決心すれば、意外にも機敏に働くことになる。例えば、以前、藩の重臣(館守・裁判)の中に速力の速い小さな船に乗って許可なく、無断で多太浦に行ったことがあるが、これを一晩のうちに鎖を使って船を埠頭の中に引き込み、とても苦勞したことがあった。この外にも朝鮮通信使一行の折を見ましても、ラッパを一度吹けば出発せよ、との告示だと思い、二度吹けば皆集合し、三度吹けば出発するのに、一人も遅れる人はいなかった。船に乗り降りする場合も同じで、午前四時出発、午前六時出発だと互いに定めれば、相手方は少しも遅れることはない。

日本人たちは髪を結び、手を洗い、股引^{ももひき}、脚半^{きゃはん}②を身に付け、太刀^{たち}、脇差^{わきざし}③を腰にさげ、印籠^{いんろう}④と巾着^{きんちやく}⑤を提げると、いろいろな準備をするところを見ると、準備を終える前に時間がかなりかかる。それで、出発時間を午前四時に定めても午前六時になり、午前六時に定めれば午前八時になる場合が多い。(そんなわけで)初めは、朝鮮側が理解できないようで、出発時間を予め早めに知らせたのであるが、(このようなことがたびたび起こるので)その後は三使の方が待ちかねるように見えるので、出発時間は出発できる時間を知らせた。このようなことは誰もが知っていることである。

訳官は中間で話を伝える人なので、たまに誤って伝えることもあるが、これはまた自然なことである。日本人で、中間で交渉する人は自然にそんな場合が多いではないか。もし朝鮮の人が皆嘘ばかりついて暮らすなら、その国自体が立ち行かない。嘘をつくのはよくある末世の習慣で、それはどの国も逃れられない悪習である。しかし、そんな悪習があっても皆が皆、嘘をつくのではないので、このような点をよく理解しなければならない。

その他、(朝鮮と日本の両国が)各々自国の風習がよいと言うが、それは華も夷も同じである。この場合、朝鮮人は日本人と言い争いさえしないでおこうとする。それで、話すたびにその国に関連することを謙遜して話すが、かえって日本人はいつも自国のみ自慢している。

酒のことを例に挙げてもそうである。日本の酒が三国一であるからといって、皆がそう考えるだろうと自慢すると、朝鮮人たちが「そうだ」と、答えるからと言って、本当にそうだと知って誇る。これを、「判断のない人」だと(朝鮮

人が) 内心嘲笑していることも解らない。

日本の酒が三国一であると朝鮮人が心から思ったのであれば、人が集まった時、「日本の酒が最も優れている」という話があったであろうに、そんな話がないのは、日本人の口には日本の酒がよく、朝鮮人の口には朝鮮の酒がよいし、中国人の口には中国の酒がよいし、オランダ人の口にはアラキチンタ^⑥がよいようで、これは自然の道理である。以前、訳官たちが集会で事実どおりに話してほしいとの要請を受けて、「私共は毎日飲んでいるのでよいと思う」という返答もあったし、また、「日本の酒はよいが、胃につかえ多く飲むには朝鮮の酒がよい」という返答もあった。ここ対馬にも上戸^{じょうご}と呼ばれる人たちの中に、京酒を好まず、むしろ対馬の薄にぐりを好む人が多いのと同じ理由である。

だとすれば、双方でよいと考ええると言って、それが必ず相手側もよいと思うだろうと判断してはいけない。これは、ささいな事で何の役にも立たないことであるが、日本と朝鮮の嗜好・風習の相違を理解する一助になるだろうと書き付けておきます。

また、日本には提灯、ローソクがあり、夜道にはこれほど便利なものはない。ところが、朝鮮人が倭館内の提灯を借りることはあっても自ら作る考えがないのを見て、「明らかによいものなのに学ぼうとしないのは愚かな風習である」と評する日本人がいる。

朝鮮の船のように日本の船を造れば、帆柱を作る費用も要らないし、帆の取り扱いも簡便で、船の上も穏やかに開き、走航も快くよろしいのに、これを学ぼうとする日本人がおりません。新羅の船がよいので、これを借りて米を運搬したとの事実が『三代実録』^⑦に見える。異国(新羅)の船を借りて我が国(日本)の米を運搬するのはおかしい事であるが、豪傑明智の人でなければその国の久しい習慣を替えることはたやすすくない。これは昔も今も困難です。朝鮮だけではない。

そのうち、提灯のあるなしは軽いことであり、船には生命の安危に関わることである。外国の良い点を学ばない愚かなことが甚だしいので、同じ愚かさにも日本の愚かさはさらに大きいと言えよう。

対馬藩は他の地方とは異なる。「日本の船と朝鮮の船とは船を造る方法が異

なり、信使を迎えるときに支障があるので、（日本の船と）形式が異なっても、朝鮮の船を造るように造ってほしい」と、徳川幕府に要請することは無用のことだと言える。したがって、予め五年、七年ほど前もって朝鮮の船のように小さな船を造り試してみよ、と船の責任者に話し試した後、本当によいと判断されれば幕府に要請し、召船^⑧をはじめ朝鮮の船のように造れないこともない。

「船が水面に浮んでいる時、陸に漬かる船^{ふね}の上部については、早船と似て造れば甚だ違った形態には見えないものである^⑨。以前、船の責任者の中に、「朝鮮の船は乗りやすい」と言う人もいた。特に、「朝鮮の船は確実である」と言う人が中にはいるので、つまらないことのようにですが書き留めておく。しかし、五年、七年を試した後でなければ易く決めがたいことである。まして今は日本の船と朝鮮の船は姿、形があまりにも異なるのに、もし帆柱を二本ずつ立てて朝鮮の船のように造れば潜商を防ぐにはよくないので、容易なことではない。

【注】

- ①日本の風俗で客を接待する礼は、初めは5日間の糧食を与え、5日が過ぎると再度支給するところから「五日下程」と称した。日本では「五日次」（おいり）と言う。
- ②歩行の時、脚の下部を身軽にしようと足首から膝下まで巻きつける帯のことで、布や革などで作り外側を紐であんだものと巻きつけるものがある。
- ③江戸時代の武士の身分を象徴した大小二本の刀剣のことで、大きいほうを太刀、小さいほうを脇差と言った。就寝する時以外は体から離さなかった。しかし、百姓も特別な儀礼の時には携帯が許された。
- ④薬物などを入れ、腰に提げる小さな箱。
- ⑤布や革などで作り、口を紐で括り、中に金銭などを入れて携帯する袋。
- ⑥江戸時代にオランダから入った酒のこと。長崎のオランダ商館でオランダ人が飲んでいて赤ぶどう酒で、商館を出入りしていた日本人によって当時の日本社会にもこの酒の存在が知られていた。「アラキ」はオランダ語で「arak」であるが、もとはアラビア語の「araq」。焼酎^{ちやうど}に丁子^{ういきしょう}・肉桂^{ういきしょう}・茴香^{ういきしょう}などで香気をつけた酒でエジプト・インドで常用する。アラキ酒、アラックとも。一方、「チンタ」はポルトガル語の「vinho-tinto」の略。珍陀酒とも言う。

- ⑦『三代実録』とは、日本の清和・陽成・光孝天皇の三代、即ち858～897年までの29年間に亘る古代日本の正史を指し、『六国史』のうち最も末期に編纂された。
- ⑧朝鮮通信使の船を曳引する対馬の船を指すようである。
- ⑨これは、日本の船と朝鮮の船の製造方法と構造および形態の違いを意味する。

15. 朝鮮と日本の官職名の相違

通信使が日本に行った時、日本側が幕府の代官に関することを文書にし、朝鮮側に送ったことがあった。この時、韓僉知^{ハン}が言うに、「代官^①と言えはとも軽く聞こえるので他の官名で再び書いてほしい」と言った。その理由は、倭館内で、「倭館」と言えはたいしたことのない官吏を意味するのでそのように言ったのである。それで、結局「代官」の責任区域を照合して、その地域の「郡守」^②と書いて送った。全てのことに、この点を心得なければならない。

【注】

- ①幕府将軍が持つ直轄地、即ち天領を支配し、年貢の収納と司法などの民政を預かった地方官。
- ②「郡守」は、郡（地方行政区画の一つで）の長^{ボス}。

16. 服飾

家老たちが六位の官服を着用するようになったのは、1711年（正徳元）から始まった。これにはそれなりの理由があるので今後は替えないようにすればよい。

17. 「官」に対する認識違い

1682年（天和2）の通信使^①の時、先例にしたがい岡崎に通信使の使番を送ったことがあった。その時、三使（正使・副使・従事官）が使番に「何の官であ

るか？」と尋ねた。すると、その使番は「日本では宰相・侍従・諸大夫と言って、京都の朝廷で任命したものだけを‘官’と言うのを知っているだけです。中国や朝鮮で‘官’と言う時のように、それが本来、現職を指すという認識はありません。したがって、（そのような規準から見ると、先の使番は）官職のない人物である」と通詞が答えた。すると、三使は「幕府將軍の禄を喰らい務める人を無官というのは不思議なことである」と言いながら疑ったとのことである。

それで、1711年（正徳元）^②と1719年（享保4）^③の通信使の時は、「もし朝鮮側で‘官’を尋ねれば、その職責を答えよ」と、通詞に頼んだ。通信使の訪日の時だけでなく、対馬の人が送使や僉官として朝鮮に渡る時も朝鮮側は日本の使信に必ず「あなた方は国で何の職責であったのか？」と尋ねてくる。そんな時は、藩庁で職責を預かっている人ならば、その職責を答え、その外、警備を預かっている人ならば、宿衛官だと答えるように通詞たちに頼んだことがある。
さむらい士以上の職責を‘官’と言い、士以下の職責を‘役’と言い、昔は、その区分が日本にも明らかにあった。ところで、武家の支配が始まった後からは‘官’と言わねばならない人も‘役’だと呼ぶようになったのである。

【注】

- ①第7次朝鮮通信使のこと。この時の正使は尹趾完ユンジワン、副使は李彦鋼イオンガン、従事官は朴慶俊パクキョンジュンであり、徳川將軍綱吉襲職の祝賀が目的であった。
- ②第8次朝鮮通信使のこと。この時の正使は趙泰億チョウテイル、副使は任守幹イムスガン、従事官は李邦彦イバンオンであり、徳川將軍家宣襲職の祝賀が目的であった。
- ③第9次朝鮮通信使のこと。

18. 鷹の献上を巡る問題

将来、通信使が日本に来る時、最も憂慮されるのは鷹たかに関することで、詳しいことは享保年間（1719）^①の通信使の記録に出ている。この時の訳官たちが中間で行なった行為が明らかに記されているので、享保信使の例を朝鮮側に提示すれば事なきことである。鷹に関しては、なにとぞ事前に幕府に報告しなけ

ればならないが、あるがまま報告してこそ事が運ぶので、これ以上のことは無い。ところで、そうしないで鷹を調達して幕府に調達しなければならない問題は異なる。即ち、鷹は生きているものであるから、もちろん、朝鮮側から余分にもっと持って来るでしょうが、遠方より来る途中、鷹が気絶するとか病になり、捨ててしまえばどうなるか？だからこの度、鷹を幕府側に伝達しますが、別幅^{べつぷく}には書かないでおきますから、そのように知ってほしいと予め老中^{らうちゅう}に知らせ、鷹だけ届けることができれば必ず先の規定どおり別幅に記載しなければならないことではないか？鷹を献じなければならない時になって、どんなことがあるとも措置が取られましようから今はここに記載しないでおく。

【注】

- ①1719年(享保4)、洪致中^{ホンチチュウ}を正使とした第9次通信使が派遣された年。
- ②ここでは、朝鮮通信使が幕府將軍に持参した礼物の品目を記した文書を指す。
 反対に幕府將軍が朝鮮国王に伝達する礼物の目録も同様に「別幅」と称した。
 このほか、朝鮮の礼曹とか東萊府使・釜山僉使^{センシ}と対馬島主との間に交換された礼物目録についても別幅の用語を用いた。一般的に、別幅は朝鮮と日本との関係のように、交隣関係にある国家と集団との間で交換される礼物を指す時に使用された。朝鮮と中国のように事大関係にある場合は「方物表」などの用語が用いられた。
- ③江戸幕府の將軍に直屬し、政務を統轄していた幕府の最高職で、定員は4～5名が月番で交替勤務した。

19. 朝鮮との交渉における記録の重要性

正徳^①と享保年間の通信使行の時には、朝鮮側と重要な論談があるたびに必ず佐役^②が相談に加わったので、佐役はその論談の内容を詳しく知っている。それでその後の記録を作成される際、朝鮮人との論談の中で重要な事項については佐役に意見を提出させ記録に書き入れた。

天和年間(1682)の記録中には朝鮮通信使が江戸城まで往復しながら各地域でどんな接待を受けたのかについて詳しく記されているが、朝鮮側と西丸^{にしまる}③に

で論議された徳松君^{とくまつぎみ}④に対する拝礼拒否をはじめ重要な議論については記録がひとつもない。

これでは後日、信使方の官吏たちの職務に何らかの助けとなる記録とはならない。これらの信使の招聘の時には、重要な協商に参加する人に書記二、三人を付け、朝鮮側との論議内容を正しく文書化し、記録作成の際には、その記事を添付できるようにすればよかろうと思う。書札方^{しょさつがた}⑤にだけ記録を負わせれば、日本に関連した記録も多いのに、通信使と重要な論議をする時には直接参加できない。また、そのたびに信使奉行から論議された内容を聞こうと思っても、御用が複雑でなかなかそこまで手が及ばない。したがって、毎度、協商に参加する者が直接書記を携えて詳しく書き付けておく必要がある。

【注】

- ①1711年（正徳元）、趙泰億を正使とした朝鮮通信使が日本に派遣された年を指す。
- ②「佐役」とは、朝鮮人役人との論談の際の記録補佐役に当たる職責を指す。
「朝鮮方使役」と称した。
- ③「にしのまる」とも。江戸城「本丸」^{ほんまる}の西部の一郭にあったことからの命名。
江戸城内の將軍の世子^{い じこみ}の居所。即ち將軍職継承者が暮らす場所を指す。今の皇居に当たる。
- ④当時の將軍である徳川綱吉の長子で、1683年に逝去した。
- ⑤対馬藩藩政の機構の一つであるが、幕府をはじめ他の藩または朝鮮に関わる書状と文書一切を取り扱った機構で、文書を保管した金庫を所有していた。

20. 朝鮮通信使帰国時の朝鮮側通詞の答礼状虚偽作成の理由

天和の朝鮮通信使一行が帰国する時、「幕府から丁重な接待を受け感謝します」との主旨の三使の書簡を対馬藩主に送付すれば、対馬藩主がそれを「幕府將軍に伝えます」と上々官を通じて交渉した。その時の書簡が作成されたいきさつが天和の通信使の時の記録にあります。その書簡の文体を見ますと、三使が書いたとは判断し難く、文意は全く日本風であった。一般的に、日本でも

大名^{だいみょう}①の使者で派遣され、接待された時には、事を終え帰った後、接待を受けた側の大名が直接謝意を表すとか、または、家老が相手方の家老に謝意を表したりする。しかし、使者が自ら自身のことのように謝意を表したりしない。まして中国や朝鮮ではさらにそのようなことはありえないので、この書簡を疑わしく思っていた。

しかし、これが先例となり正徳の通信使の時にも上々官を通じて先例どおりにしてほしいと要求すると、三使は帰国後に処罰されるので書簡を残すことは出来ないとして遂には拒絶した。

享保年間にも同じ交渉があったが、三使はそのような書簡は信じられないと訳官を通じて伝えてきたし、天和年間の書簡をお見せしたのに、とやかく言って納得しなかった。

そうして天和年間の書簡を検討せよ、との命令を伺った結果、図書^{ずしょ}②も疑わしかった。天和年間（1682）では訳官たちの心構えがどうであれ、日本人の心を逆なでしないようにすることを第一にした頃であった。（その時、訳官の）朴同知という人は、日本の事情もよく知り、こんな書翰は必要ないと一旦は思い出しましたが、対馬で受け入れなかったのも、途中で自ら作り三使の書翰だと指し出した偽作のように見えます。訳官たちはこのいきさつを伝え聞き、また推測も可能なので、正徳・享保年間に對馬藩から三使の書簡を要求した時、彼らが伝えたいというのが、実際は三使に伝達しなかったものと思われる。したがって、このように江戸幕府に対し、ほんの礼儀上にと不当な要求をするのは元来よくないことである。

【注】

①江戸時代、將軍の直參^{じきさん}で地方にて知行^{ちぎょう}一万石以上の領地を有した武士で、幕府將軍に奉公の義務を負う代わり、自身の領国（藩）に対する支配を認められていた。江戸年間、260～270名に達する大名家が存在した。

②「図書^{ずしょ}」とは、朝鮮が日本に送った書簡に用いた銅印。

21. 朝鮮人送還手続きを巡る両国の理解と相違

天和（1682）通信使来日の時、対馬に漂流した朝鮮船舶や漂流民を他の船舶に兼帯して送還するように定まった時、破船して溺死者が発生した場合には、対馬の使者が派遣されるべきものと真文^①を送り朝鮮に知らせたことがあった。ところがその後、秋山折右衛門^②あきやませつゝ うゑもんが派遣された時から錯誤が生じ始め、対馬では約束どおり行ったと言うが、朝鮮では約条に食い違うことがたびたび起こった。これに関しては訳官たちがいろいろと弁明を並び立て混乱させたので、早く埒^{らち}があかなかった。それで、私、雨森東五郎がいち早くこのことを疑い、先に真文が作成した書簡を訳官たちが中間で手にしながら朝廷に伝達しないのではないかと考えた。朝鮮朝廷から朝鮮人の対馬への漂着の件に関し、兼帯送還するように交渉して来いと命令を受け、全くその通り済ませてきた、と彼らが帰国して朝廷に報告すれば、彼自身はもちろん功を立てたことになり、状況がよしかろうと思う。

ところで、破船殉命の場合には、対馬から使者を派遣することで事を済ませて来た、と言えは事の状況がよくない。また、破船殉命が毎回起こるのでもない。もし、そんな場合になればその都度^{つど}どうにかなるだろう、と思い、さきの書契を提出しないで保管しえとも考える。そんな矢先、享保（1719）通信使が江戸に先立つ前に破船殉命が生じた場合には使者を派遣させることを約束したという話を聞きつけた。だとすれば、その時、作成したという書付^{かきつけ}を見たいと言うので書付を送った。

天和年間に、訳官たちが（まさにその時に）提出したものだとなれば、右の覚書は朝鮮にもあったはずであるから確認してみたいとは言えないはずである。にもかかわらず、このように要求するのは天和年間に、結局、提出しないのではないかと、なお不審に思われた。ところで最近、朝鮮の書物を見たところ、壬戌（1682）の通信使の時、漂船が漂着すれば、九送使^③便に順付し送還すべきことを約条したという覚書があった。ところが、破船殉命の件に関しては記載がなかったので、この時になってはじめて、訳官たちが天和年間に右の書契を確かに中間で保有しておきながら、それを朝廷に提出しなかったこと

をはっきりと知ることになった。

享保の通信使一行の時、鷹に関して、私、東五郎が韓僉知^{ハン}に、「この度は、このように取り繕い済ませておきますが、将来、通信使の招聘の折は必ず前例に違うことや問題がある筈である。そんな時にはどうしますか?」と、尋ねると、「その時まで我々が生きているのでもないので、その時になればどうにでもなりましょう」と、何でもないように返答した。天和通信使一行の時の訳官たちも右の韓僉知^{ハン}のような心構えであったと思われる。こんなこともあって対馬では明らかに約束を済ませたものと知っても、これはひょっとして、訳官たちが中間でしでかしたことはないか。だとすれば、わざと議論しても、むしろ事が失敗するのではないかと、毎回、事が危ぶまれる場合が多い。だから、事の前後をよく考え、判断し、全てのことを慌てないようにしなければならない。

天和年間、対馬に漂流した朝鮮人を兼帯し送還されたのは、このことがうまく処理されれば、狐と狸の皮の価格が上がるように斡旋してやる、と言いながら、上々官^{カシイハム}④が裁判を取り止め、他の筋を通じて明らかに話してきたので、その通り定めたのであった。しかしその後、狐と狸の皮の価格には、結局、何の変化もなかった。これはまた、後日のために知っておかねばならないことである。

【注】

- ①「真文」とは、漢文で作成された文書のことを指す。
- ②秋山折右衛門は、1697年(元禄10)10月、破船殉命船使として朝鮮に派遣され、接待された。朝鮮側の資料には藤貞重と記録されている。
- ③第9次朝鮮通信使のこと。
- ④「上々官」とは、「堂上官」のことで、朝鮮時代、宮殿に登ることを許された正三品以上の官僚。本文では、堂上訳官を指すと思われる。

22. 通信使招聘時の接待経費の問題

正徳年間には、通信使を接待する大名が提供する人夫と馬に余裕があり何ら

不便がなかった。これは天和年間でも同様であった。ところが享保年間になり、通信使に提供する人夫と馬などが請負形式に変わり、甚だ不便をきたした。そのため、日本に対する評判もよくなかった、将来、通信使を招く時には、天和・正徳通信使の時に従って御用命くださるよう予め幕府に報告しなければならない。^①

【注】

- ①1709年1月、將軍綱吉が死去し、継いで6代將軍として家宣が襲職した後、新井白石が將軍家宣に近侍、登用され1711年(正徳元年)に、白石の建議により朝鮮通信使聘札の改革がなされた。同年5月、芳洲はこの改革を伝える任務を帯びて朝鮮に派遣された。白石の建議と改革主張は、日本国王の称号改革、通信使接待費用の格下げの画策、江戸城での御三家列席不可の問題などであった。後、1712年10月、家宣が死去、第7代將軍として家継が継ぐが、1716年(享保元年)8歳にて死去することにより吉宗が8代將軍に襲職し白石は罷免された。そして翌年(1717)、朝鮮通信使の聘札が天和の札に戻された。同年8月、芳洲は江戸藩邸に赴き30石、増された。因みに、白石は1725年5月、69歳にて死去した。

23. 通信使帰国の際の船出問題

日本の船と朝鮮の船は、その機能が異なる。日本船が出航しにくい天候でも朝鮮の船は軽快に出航できるので、我が方では船出しにくい天候だと聞いても、朝鮮側の船長は「実に出航しやすい天候でござる」と言って、いつも差がつく。だから日本の船と朝鮮の船が異なることを予め朝鮮側に理解させなければならない。その上、藩主が旅行中に、船中や道中に逗留することになれば、相手側は幕府から何か代価を望むためだと記録してしまう。それは、正徳の通信使の時の訳官^①も享保の通信使の時の訳官^②も皆そうであった。

それで「船出できる日にもかかわらず、わざと逗留する」との疑いがあることをよく知っておかねばならない。

【注】

- ①1711年(正徳元)に通信使に随行し、派遣された訳官は、上々官の^{オウサンジブ}崔尚渚をはじめ、上判事、次上判事、押物判事、小通事を合わせ20名であった。
- ②1719年(享保4)に通信使に随行し、派遣された訳官は、上々官、押物判事、小判事を合わせ21名であった。

24. 通信使と対馬の風儀の違い

一体、三使の心構えはいつも日本に抑制されないでおこう、とするように見える。しかし、一度も抑制されたことがない。日本と朝鮮の風儀(風習)に違いがあって、朝鮮の考えでは日本に合わない点があるので、両国間に何かよいようにしようとの趣旨で意見を提出したものである。昔の言葉にも「使従俗礼従宜^①(使臣は相手の風俗に従い、礼は道理に従う)」と言いましたから、朝鮮の国柄に従うのは格別なことである。その外、当方で示す意見を通信使一行がよく聞き入れられるよう丁寧に対しなければならぬ。

【注】

- ①「使従俗礼従宜」の6字は、本資料では漢文調で表記されている。

25. 通信使の招聘の際に揮毫を申し出る問題

通信使を招聘した時、旅の途中、書き物(揮毫^{きごう})を禁止したのは天和年間に始まったもので、天和年間の記録に詳しく、元来、我々が要請し、幕府がそのようにしたのである。

筆談などを^{みた}安りにすれば国事を漏らすおそれがあるからである。禁止したことには訳があるが、揮毫してやることまで禁止するのは無理なことで、守られもしないので重ねて禁制しても無理なことである。また、通信使が来れば方々から揮毫してくれるようにと頼まれ、家老に申し出て、仕方なく一つずつ頼まれる。この揮毫を作成することで、信使の部屋は特に騒々しく、他の用務の妨害^{はなは}となることも甚だ多かった。

将来、通信使が来て、揮毫の頼みがあれば額字の場合は二、三枚、一枚の唐紙^①に書くとするれば二枚か六枚、屏風用でなければ決して頼みを聞いてはならない。その意味を通詞頭に知らせ、通信使一行に用紙を送った者に限り作成してやるようにしなければならず、家老たちに揮毫の作成に関わらないようにしなければならない。この揮毫作成のために、通信使一行のいる部屋はとても慌しい。特に、享保年間に、^{かめい いきの かみ}亀井壺岐守よりは^{ひとさお}長持ち一竿に裏打ちした唐紙をたくさん入れ、揮毫を作成してくれるように所望した。そのため通信使一行が対馬に戻る道中と船内では休まないで作成したが終えることが出来ないほどであった。おそらく対馬藩士たちが各自願い出たものもその中には混ざっており、そのように多くの分量になったものと思われる。何らの利益もならないことで、その度に家老たちにも迷惑をかけ、また官吏たちも事をなせないようにするので、これは一体どうしたことか、と思う。

【注】

①楮や竹の繊維で作った紙で、主に書画を作成する時に用いた。

26. 通信使に対する詩文の請託

詩と文章は、真文役^①以外の他の人を通じて請託することがないように固く指示しておかねばならない。他の人を通じて請託すればよくないことが大変多いからである。

【注】

①通信使一行が江戸を往復する時、通信使一行に随行した対馬藩の儒学者として漢詩文に明るかった。なお、真文とは、漢文のこと。

27. 京都における大仏参観の拒否

通信使一行に大仏^①に立ち寄るように、以前は予め朝鮮側に知らせておいたが^②、これからはそんなことがないようにしなければならない。その理由は、享保の通信使（1719）の記録に詳しく出ている。

明暦年間^③に、日本側が通信使一行に対し、日光^④に参拝するようにしたのは廟堂の華麗さを見せるためのものであることは分る。大仏に立ち寄るようにした訳は二つ考えられる。一つは、日本に珍しい大仏があることを知らせようとのことであり、二つ目は、耳塚^⑤を通信使一行に見せることにより日本の「武威」を表現しようとのことであると考えられる。

しかし、それは極めて安易な考えであった。廟制^{びようせい}は儉約を重視したので、柱に朱色に塗るか、垂木^{たるき}に刻んだりするのは『春秋』^⑥でも非難されたことなので、廟制の華美に朝鮮人たちが感嘆するはずがない。仏の功德は廟制の大小にあるのではないので、貴重な財貨を費やし、無益な大仏を築くのは人の嘲りを受けるものである。

また、耳塚を見ても、それは豊臣家が名分^{めいぶん}のない師^{いくさ}を起こし、両国の多数の人民を殺害したのである。したがって、耳塚への訪問はその暴虐さを重ねて露^{あらわ}にするもので、そのいずれも日本の華麗さを表すのに何の役にもならず、かえって無学、無常識を表すものである。正徳年間（1711）の通信使一行^{こうし}^⑧が大仏に立ち寄った時、耳塚を隠しておいて見せないことがあったが、享保年間（1719）にもそのような先例を挙げ朝鮮人に見せなかった、という。これは、実に徳に溢れることであったと言わねばならない。この点もかねてから新井筑後の太守に真意を伝え、互いに心が通じ合ったので隠すことができなかったのである。事情がこうでありますから、将来また通信使が参りましても京都宿泊と大仏参観を慎まねばならない。長旅が始まるかもしれないので、以前（享保年間）から京都で休息を取るようにせよ、とのお達しがあった。これは、川船ですぐに行けば無理がありはしないかとの理由があろうが、幸い湖水^⑨は日本の絶景であるので、そこに宿泊すれば通信使一行も喜ぶはずである。だから可能ならば、‘高観音’を通信使一行の宿所に定め、大津で二日ほど休息できるようにしなければならぬ。^⑩

享保年間（1719）に、「京都を、昼食時に暫らく休む場所にせよ」と、幕府將軍から指示が下り、予め朝鮮側に、その意を伝達した。ところで、三使が病を口実に（大仏参観を拒んだので止むを得ず予定になった）京都に留まることになった。京都で暫らく休息しながら^⑪、大仏を参観する件については朝鮮の

訳官たちが都（漢陽）^{ハニヤン}に知らせなかったものと見える。

【注】

- ①豊臣秀吉の命に従い、1586年に制作された高さ18mの坐像大仏で、京都方広寺に安置されたもの。1596年の地震で破壊された後、何度かに亘って制作された。
- ②通信使の京都における大仏参観は、1617年、伏見において、第二代徳川將軍である秀忠に会い、儀礼後に、大仏前で幕府の招聘宴があったことに始まる。そして、1634年には、江戸城での儀礼を終え帰路の時、対馬藩主の招聘宴が大仏前であったが、この時から岐路の一行事と位置づけられた。
- ③1655年（明暦元）、趙珩^{チョウヒョウ}を正使として派遣された第6次乙未通信使一行を指す。
- ④日光にある東照宮のことで、徳川家康を祭った神社を指す。
- ⑤京都の豊国神社付近の方広寺にある墓地を指す。「文禄・慶長の役」の戦に参加した日本の大名たちが殺害した朝鮮の軍人たちの耳を切り取り埋葬したが、実際は、耳ではなく鼻を切り取り持ってきたので、「鼻塚」としなければならぬとの主張もある。元来は、首を切り取らねばならなかったが、朝鮮からの多数の持参となると重いので、鼻を塩漬けにして運搬し、自身の戦功の証拠にした。
- ⑥儒教の經典である五經の一つとしての『春秋』を指すものと考えられる。この書物は春秋時代の魯の国の隠公から哀公時代までの十二公の242年間に亘る宮廷年代記であるが、孔子の歴史意識が反映されている。したがって単純な歴史書ではなく、事件や人物が孔子の礼と名分を重視する政治理念のもと、批判され、評価された大義名分を披瀝した書物だと言える。
- ⑦名分とは、道德上、身分に伴って必ず守るべき本分。即ち君に対する臣としての本分。
- ⑧1711年（正徳元）の第8次朝鮮通信使一行。
- ⑨滋賀県大津近くの琵琶湖を指す。
- ⑩1719年の通信使一行は、大津の本長寺で一泊したことがある。
- ⑪1719年の通信使一行の岐路の折、大津に滞留したが、京都大仏の参観の連絡

を受けた通信使一行は「朝鮮の恩讐である豊臣秀吉が建てた寺院に参観することはできない」と言って、これを拒否した。これに対馬藩と幕府側が通信使一行を説得するための方法を模索し、通信使側に参観を要求したが、通信側が継続して拒否する間に、日程に手違いが生じ、結局、予定になかった京都の本能寺に宿泊することになった。

28. 朝鮮人と日本人の認識違い

天和年間(1682)にあったことである。(通信使一行が通過する)日本の道路周辺の街路樹がみな古木であるのに、枝葉が損傷したことがないのを見た三使が、「法令の厳粛なためであろう」と言いながら、特に感心した。

日光の大仏を通信使一行に見せつけることによって、その雄壮さと華麗さを過視できると考えたが、それに感嘆もせず、むしろ日本人たちが思いもよらなかった街路樹に通信使一行が感嘆したことを考える時、これはまた、日本と朝鮮が重視する価値がどこにあるのか、その違いを知らねばならない。

正徳年間には、道中の乞食をことごとく追い出してよかったが、享保年間には、盲人と比丘尼^{びくに}①たちまで徘徊し、見苦しいことであった。これはまた、次の通信使の時、予め幕府に申しあげなければならないことである。

【注】

①比丘尼^{びくに}は、江戸時代に尼の姿で売色した下級の私娼。

29. 通信使応接の際の儀典問題

享保年間の通信使に随行した護衛軍艦が乗馬しないのはどうしてか分らないが、それ以外の上官たちを駕籠^{かご}に乗せたのは、彼ら自身のためにもよく、接待を担う日本の大名たちも費用を節約できることでもあるので、訳官たちと相談し頼まねばならないことであれば、幕府に上申しなければならないことを知らねばならない。しかし、確かに事がなるかならないか分らないので、決定づけることはできないと裁判に伝達した。

ところで、裁判がうっかり忘れ、訳官たちに知らせず、すでに各藩に指示が下り、馬の割り当てが完了したひょうしに連絡が遅れ、その措置までは及ばなかった。これからはどうか護衛する人以外には駕籠にすればよからうと思う。享保年間に、書記たちが乗らねばならない駕籠を、軍官たちの中には書記を押しのけ乗る輩^{やから}がたまにいた。将来来る通信使の時には、軍官たちも駕籠に乗る先規があるので、必ず駕籠を願うことがあろう、と思う。

30. 朝鮮側の訳官に対する取扱い

訳官には格別に恩賜^{おんし}を厚くし、対馬のお陰がなければ身が立ち得ないと考えるようにしておかねばならない。幕府に対することに喩えれば、老中のご用人(補佐役)を格別に配慮するのと同じ心構えを持たねばならず、訳官たちが対馬を疎^{おろそ}かに考えてはならない。将来、これが常例にならないよう処置することが極めて重要である。参判使が渡海する時、木綿^{もめん}を受け取るのは、最初は特別な恩賜であったが、今は常例のようになった。それではよくないと考える。

古館^①の時、こちら日本側から要請したことが、永い間、埒^{らち}が明かない、と訳官の中の李判事という日本人と内通した者が「私を東萊府使の前でさんざん叱っては、殴りなさい。そうすればこのことが終わりますよ」と言うので、その通りしたところ、果たしてこの事の埒^{らち}がきました。訳官の身でそのような話をする筈^{はず}がないが、その時までは戦乱^②後に残っていた威勢のために、何事につけ日本人の暴逆性を怖れる気が強かった。それで侮辱されてもこのことを早く決着をつけ、一時の苦難を免れようと考えたのが、そのような忠告をした理由の一つであった。

また、その時までは商売の次第も相手方(朝鮮人)やこちらの人(日本人)や皆が、今と違い、日本人たちのために活動すれば、その人にも利となるところがあったので利得に目を掛ける心もあった。「威脅利誘^③(力で威脅し、利得で誘う)」、この二つの理由のせいで、先のような内通をするに至ったのである。この外にもこれと似たことがその時まである程度あったので、李判事一人だけではなかった。今は、余勢もなく、活動しても別段、利益を考えることも

ないので、判事の心遣いが昔日とは大きく異なるので、恩賜するところに格別気を使わねばならない。特に、商売で商人と親しみ、訳官たちを疎んじるようならば、隣交に必ず支障が生じるのでよく考えてみることである。近來、誰か下位の小役人の中に、昔の方法を伝え聞き、東萊府使の前で訳官の鬚をとつかまえるや、訳官たちが憤怒するあまり、遂にことが破局を迎えたという。これは、よく言う昔のやり方を分かちえず、事情と時勢を区別できない誤った考えである。

【注】

- ①1678年に、倭館を草梁に遷した後、それ以前の豆毛浦倭館を古館、草梁倭館を新館と称した。
- ②「文禄・慶長の役」を指す。
- ③「威脅利誘」の4字は、本資料では漢文調で表記されている。

31. 送使の所務

対馬藩の時勢がよくないので、朝鮮に送る送使を雇用したのはすでに二度にもなる。今後またこのようなことがないと言い難い。送使が朝鮮からもらってくる所務(支給物)を藩の倉庫に入れてあるが、これは藩の利益になるように見える。しかし元来、対馬藩主の部下に朝鮮が支給した穀物などを藩に収納するようにするのは道理に合わないのみならず、朝鮮人もよいとは考えておらず、藩士たちの難儀も深刻となることはもちろんである。当時は、それが助けとなるように見えても結局はためにならない。これを人々が分らないのは、いくら慨嘆しても足らないので、もしそのようなことをするように進言する人がおれば上から叱責しなければならない。

32. 「文禄・慶長の役」後の日本の武力に対する朝鮮の警戒

倭館が豆毛浦にあった頃(古館の時分)までは、豊臣秀吉の朝鮮侵略による余勢が残っていた。そのため、どんなことでも朝鮮人に無理を押し付けられ、

訳官たちは彼らの立場が難儀になったあげく、(両国の) 中間で、事が何であれ、よい結果をまねくよう取り繕い、ならぬこともなるようにした。そうして人々は「以強狼取勝^① (狼のごとく暴虐に吠え立て屈服させる)」ことこそ朝鮮を制御しうる最もよい方法だと心得ていた。

倭館を草梁に遷してからは余勢もだんだん薄くなり、わざとけちをつけたり、無理に押さえつけて、事をなすことも叶わぬ形勢となった。しかし人々は、余勢が弱まったことが分らないまま、対馬の対処方法がよくないためだと考えている。「対馬の一件^{けん}」^②までは威力と^{きょうかつ}恐喝を使ってでも」こちら(対馬)の主張を貫徹しなければならないとの雰囲気であったが、七年間に亘り交渉してもそんなことは通じないばかりか、むしろ対馬の評判に支障があるとのことで形勢が変わった。それで、最近三十年前(1700年頃)からは先のような風潮も消え、今はまずまずの対処のありさまである。

しかし、朝鮮人の才能と知恵は日本人の及ぶところではない。だから将来何事につけ、対処方法がよくなければ、世人の言う「某氏の本刀」の謂いのように、こちらとあちらの立場が逆転するおそれがある。だからこの点に注意しなければならない。四、五十年前までは、日本人が刀を抜けば、朝鮮人が恐懼逃奔^③ (恐れ^{おの} 慄き逃走) した。ところで、もう十四、五年ほども経ったであろうか。炭薪を取りに行った輩を朝鮮の軍官の中の一人が刀を振りかざし、追い散らした者がいた。「履霜堅氷至霜^④ (霜を踏んでこそ、堅い氷に至る)」と言うのは、まさにこのようなことを指して称するのである。だから思慮深い人ならば、将来起こることに対して熟考しなければならない。

【注】

①「以強狼取勝」の5字は、本資料では漢文調で表記されている。

②1693年(元禄6)、東萊府の亡父安龍福の鬱陵島渡海を契機に、日本人が鬱陵島(竹島)海域で朝鮮人の漁業を禁止した事件を指す。この事件を契機に鬱陵島の隸属および漁業権を巡る両国間の是非があったが、1697年に徳川幕府が日本人の鬱陵島の渡海および魚漂活動を禁止することにより事件は一段落した。

因みに、安龍福は東萊府出身の漁夫であったが、1693年、朴於屯とともに

鬱陵島に出漁したが、日本人漁夫に島根県所属の因州に拉致され帰国の途中、対馬島主から幕府の命令だと言って朝鮮人の出漁を禁止してほしいとの要請書を携えてきた。その後の1696年、再び10余命の漁夫と鬱陵島に出漁、ついに漁労中の日本の漁船を発見し、松島（即ち独島＝竹島）に強制留泊させた後、朝鮮海域に入り、そこで漁をし、侵犯した事実を問責した。その後、鬱陵、于山両島の監税と自称して島根県の^{ほうき}伯耆州に行き藩主に犯境の事実を抗議、赦罪を受け帰国した。翌年、徳川幕府は対馬島主を通じて公式に日本の出漁禁止を通告してきた。〈『肅宗実録』を参照〉

- ③「恐懼逃奔」の4字は、本資料では漢文調で表記されている。
- ④「履霜堅氷至霜」の5字は、本資料では漢文調で表記されている。この用語の表現は、何事であれ、大事件が起こる前に、すでにある兆候が現れるものだ、との意で、そのような兆候が現れるのをよく察し、事前に対策をたてなければならぬことを強調したもの。

33. 「敵国」という用語の意味

古来の朝鮮の書物を見ると、「敵国」という文言がある。「敵国」とは、‘互いに礼で対する相手国（対礼の国）を意味する’ものである。ところで、人はこれを分からず、‘（このように）誠意を以って隣交関係を結びながらも、朝鮮では今でも旧怨を忘れず、日本を敵国と記載する’（日本人は）考えている。また、朝鮮が‘対馬が朝鮮のために海賊を防禦している’と書いたとして‘対馬者朝鮮乃藩屏’（対馬は朝鮮の藩屏である）という話をこちら（日本）の書物でも記載している。この藩屏とは、家来が主人に対して（自身を）称する言葉なのに、これが分からない人がいる。

このようなことは、我ら学問的素養の足らない人には今もありうることで、その弊害を避けがたい。文字をきちんと理解しなくては判断もそれに応じてするしかないものである。とにかく対馬は他の藩とは事情がたいへん異なるので、学問的才能の勝れた人を確保できなければ、いくら誠を尽くすとしても隣交の条理を打ち立てがたいと考える。したがって学識のある人を重用するのはとて

も大切なことである。

34. 倭館で消費する炭薪を米穀の代わりに支給する問題

倭館に入ってくる炭と薪の一年間の消費量を計算し、その分を米で入れようとする問題で、訳官たちが秘密裏に「水夫^①（町人）たちと相談したところ、宜しい事と申す者がおりました。倭館ではいつも使う炭薪^{すみたきぎ}は毎年水夫たちに切って、持って来るようにしておりますので、米の代わりにもらうのが利益となるよいことだという人もいます。しかし、定められた年条（毎年恒例）の耕作米さえも未収で残す朝鮮人なので、炭薪の代わりに米でもらうことはなんら問題なからうとは言いがたい。その上、年条の耕作米の中には、炭薪の代わりに、と言いながら入ってくるものがあれば、結局はよからぬことになるだろうから、先のことは取り止めた。

炭薪の代わりに米をくれる代米問題は、朝鮮側では少しも滞りなく米を送り届けてくれるとしても甚だ不便である。なぜなら、今までは倭館で、館守・裁判・送使・横目^②など、臨時の送使たちが炭薪を充分使っており、残ったものは倭館に居留する他の者たちにまで行き渡るほど充分にもらった。ところで、上からいくらずつと定めて炭薪が支給される場合には、間違いなく、その数量に対する基準が定まるものである。したがって、文書上からは上出来のように見えても、実際、これを執行する場合には、倭館に居留する日本人たちが非常に困難をきたすはずである。その上、毎年支給される炭薪の量は相当なので、両国の検問所でもこれを点検するところまでは手が及ぶ余裕がない。その外、当時、考えも及ばなかった不便な点がいくらでもあるので、分別がないと言っても、このような分別のない場合は二度とないことである。これも眼前の利益だけを考える時のみで、長期的眼目で見た時、よくないとする点には及ばなかったのである。

およそ朝鮮のことに對しては、今まで以上に利益になることがなかろうか、と考えるのは全てよくない。なにとぞ、今のように別条なく継続するようにと考えねばならない。

【注】

- ①「水夫」とは、船乗りのことであるが、雑役に従事する普通船員を含み一般の町人を称して言ったと思われる。
- ②「横目」とは、横目付よこめつけ(武家社会で将士の挙動の檢察をし、非道の弾劾を司った者)の略であろう。

35. 朝鮮女と対馬男の交奸

深見弾右衛門^①が倭館の館主の時、倭館に朝鮮人女性三人を囲っていたことが判明した。倭館側は東萊から受け渡されたいとの催促があり、仕方なくその女を密かに倭館外に差し出した。すると、東萊府は倭館外でその女を捕らえ検問した後、斬首刑に処した。そして倭館側に対しては、具体的に犯人の名を挙げ、朝鮮人女と姦淫した日本人を差し出すようにと要求したところ、倭館を追及し問責するのは極めて厳しかった。しかし、館守はあれこれと言いつくろいながら会うことを避けた。そのうち年月が経ち、ついに犯人を差し出さないまま事が終わってしまった。当時、皆の者は館守が事をうまく処理してしまった、と言った。

宝永五年(1708)、崔同知^②が渡海訳官^③として対馬に派遣された時、白水源七という者が朝鮮人女と交奸したので処罰しなければならないとの礼曹^④が作成した書簡を持って正式に知らせに來た。これについては、既に深見弾右衛門の時の訳わけもあるので、訳官を叱るとか説得してみた結果、かねてより聞き及んでいたとおり、今まで朝鮮が対馬藩を恨んできたのには種々あるが、その中の一つが交奸した犯人を差し出さないことであり、もう一つは、倭館を新築することであった。朴僉知が言うに、朝鮮朝廷では次の通信使の折、江戸表^{おもて}にて幕府を直訴するのがよからうとの議論が有力なので、もし西人が三使として派遣される場合には対馬藩が難儀になるだろう、と言った。このようなことを聞かずとも、世と不正、事物の義理を考えれば、朝鮮と対馬藩が隣交を結んでい
る間柄なので、朝鮮から厳しく禁じられていることは対馬の人たちにもその法を違わないう分別しなければならないことである。したがって、藩主の命令

を守らず、法を犯した者にたいしては朝鮮と同罪に処罰しないとしても、それに相当する処罰をしなければならない。そうして藩庁の判決では、源七を朝鮮に送致させ、その罪状が明らかになれば、終身流刑に処するであろうとの内容の覚書を訳官に伝達し、訳官が持ってきた書簡は受け取らないのがよかろうとの結論になった。そのとおり施行し、覚書だけを伝達し、源七を朝鮮に送致した。ところが訳あって対決はできなかったが、源七は対馬に戻った後、門中の要求に従い流配となり田舎に下った。

その後、正徳年^⑤に三使^⑥が派遣され、私(雨森芳洲)が江戸まで三使の往還に同行したのだが、もしかして三使が交奸問題を申し出はしないかと考え、これに對備して交奸事件に関する記録類を持って行った。ところが案の定、江戸を発つための最後の挨拶の頃、やはり三使が右の交奸事件に関する話を持ち出した。交奸事件をしでかした者に対して、対馬藩が日本人も朝鮮人と同じ刑に処しなければならないとの返答がない場合は、江戸を発つ時にやり逃げねばならない挨拶もいたさないし、幕府に直訴すると、上々官を通じて話して来た。しかし、この問題については予め対応策を立ててきたし、幕府にも非公式に報告しておいたので、次のように返答した。

「右の交奸をしでかした犯人は昨年の渡海訳官の崔同知に覚書を申し渡したように、終身流罪に処したのであって、朝鮮人と同罪に処するとの返答はしなかったはずであります。日本国の慶事を祝うために来られた三使たちがこのような些細なことで幕府に直訴するのはよくないことだと考えられます。しかし、我々が三使にそうなさいますな、と忠告すれば、対馬の人を擁護しようとの私心からであろうとの疑いが持たれるかもしれません。それで、お勧めいたしません、幕府に直訴する気がございますればお気に召すままされればよろしく、その時は、我が対馬藩を取次ぎなさってもよく、接待役を引き受けた領主に取り次ぎ役を申されてもよろしゅうございます」

これに三使は、結局、直訴を押し延ばすこともかなわず、その後、対馬藩と互いに合意し、交奸した者に対してすぐさま終身流罪との約定を交わすことになった。委細は通信使記録に記されている。

ところで、右の交渉をした時、対馬の通詞の中の一人が次のような話をした。

昨年、白水源七を朝鮮にまで送り届けなくとも簡単に解決できたものを、朝鮮の事情がよく分からず、その問題を厳しく扱ったのだと以前はそう考えた。ところが、今になって考えてみると、その時、そのようにしておかなかったならば、この度は間違いなく全く身動きできぬはずである。それで、今になって感心するしかないとのことである。

これも時勢を弁えず申したまま、何時でも押し付けさえすればよいと考えたためである。今まで状況を充分理解し得ない人は納得しないであろう。とにかく義理を詰めず、無理に押し付けられれば解決されると考えるのは将来に亘り弊害を招くものである。

【注】

- ①1688年7月から1690年まで倭館の館守を歴任した。
- ②1708年、堂上官として対馬に派遣された崔尚漢^{チュウサンガン}をいう。
- ③司訳院(朝鮮王朝時代、翻訳や通訳事務を司った官庁)の倭学訳官を正使として立て、対馬に派遣した外交使行として、主に対馬藩主が江戸参勤を終えて対馬に戻ったことを慰労するために派遣されたため、「問慰訳官」とも言う。この外、対馬島主家と幕府將軍家に弔慶事がある時や外交懸案を妥結するために渡海したので、これを称して「渡海訳官」とも称した。朝鮮後期は54次に亘り対馬に派遣された。
- ④朝鮮時代の六曹の一つで、儀礼・外交・教育などを司った高級官僚。
- ⑤これは、朝鮮から日本に通信使が派遣された1711年、日本の正徳元年のことなので、正徳信使と称する。
- ⑥「三使」とは、通信使の正官としての正使・副使・従事官を指し、1711年の第8次朝鮮通信使の時には、正使として趙泰億^{チョウテイク}、副使として任守幹^{イムスガン}、従事官として李邦彦^{イバンギン}が派遣された。

36. 礼下程と別下程

対馬藩のある裁判に朴僉知^{パクカンチ}が言うに、「裁判は日本人と申しながら、常に朝鮮が手助けしているので、朝鮮に対しては特別に大切にしなければならないは

ずの場合でも、実際はそうなりえない」と言いながら、朝鮮朝廷がこれを不満に思っていることを話した。すると裁判が、「裁判に手助けを与えるのは何を意味するのか」と、尋ねた。これに朴僉知が「毎年、倭館の代官に木綿を何束づつ^①渡すのを知らないのか」と述べ笑い話になったことがある。はたして、昔は朝鮮から与えるものを裁判たちが直接受け取っていたが何時からそうになったのか。代官側から受け取り対馬藩の収入としたが、その内訳については知るすべがないからである。

また、倭館のある僉官が朴僉知に言うに、「以前は、僉官ごとに礼下程^②というのがあったが、今は別下程^③だけで礼下程がなくなったため、旧例どおりしなければなりません」と言った。すると、朴僉知が「それは考え違いと言うものです。以前は、朝鮮人が別下程をくれれば日本人がその返礼として礼下程というものを与えたのであるが、その後は取りやめることになった。対馬藩は今までも朝鮮の判事に銀をあたえるのは礼下程の代わりに与えるものである」との返答であった。

この外、いま僉官がもらっている^{こうじまい}麴米というのも以前はなかったものである。朝鮮が送使たちに経済的支援をする時、「何々の目的で来た送使の麴米だ」と言って、代官に持ってきた者がいた。代官側は、「海東にも麴米というものはないけれども、とにかく請け取るべき分け前と見えます」と言いながら、その時から朝鮮に要請してもらい請け始めたのであるが、それが既に三十年の常例になった。これは、対馬の役人たちが自分たち自身の利益にしたものと解せられる。

およそ朝鮮に関したことは年を経るにつれて昔の法式を失っていくが、これは自然なことである。したがって朝鮮に関した業務を取り扱う者はこれを明らかに記録しておかなければならない。

【注】

- ①「木綿一束」とは、木綿五十疋^{ひき}（反）のこと。
- ②③もともと下程とは、餞別金のようなもので、対日関係では「礼下程」と「別下程」があった。別下程とは、朝鮮に來た日本の使臣が日本に帰還する時、朝鮮が日本の使臣に与える礼物を意味する。礼下程とは、朝鮮が支給した別

下程に対して日本の使臣が朝鮮に送ってくる礼物を指す。

37. 訳官の人柄の判断

朴僉知^①のことであるが、当時、朴同知・安同知^②と同じ事をなしたが、対馬藩に役立つと考え、訳官の中で三傑と呼ばれた。朴同知は日本人が口を揃えて称賛したし、朴僉知については、人により称賛する者があるかと思えば、またある者は嫌ったりした。元来、朴僉知は訳官たちの間でも特別に尊敬される人物で、若い訳官たちはみだりに話し掛けもしない人品の所有者であった。

およそ訳官たちの善悪を判断しようとする時は、朝鮮の人が尊敬し遠慮する人は行儀が正しく妥協することのない人と判断すればよく、朝鮮の人がたやすく親しくし、接近しやすい人は性質が温和な人と知ればよい。朝鮮の人がどのように反応するのかにしたがい、その人物の高い低いを知ることができる。このことは大変重要なことだと言える。日本人の議論だけでは信用しにくいものである。

【注】

①「僉知」とは、僉知中枢府事の縮約形で、朝鮮時代の年老いた人の閑職であった。

②「同知」とは、朝鮮時代の官職を持たない老人に対する敬称。

38. 送使僉官の記録の必要性

送使と僉官が朝鮮から五日次^①を支給される時、鰯^{たら}と青魚^{にしん}のような品物が一枚不足しても、役人どもが礼房^③・戸房^④と争うので見苦しい時がある。

元来、他方に使者として派遣された人は相手方の取扱いが丁寧であれば応対が丁重であると思い、相手方の取扱いが丁寧でなければ応対が疎かと考える。(普通は)そう考えるだけで止め、当方であれこれ詮索するほどのことではないのは言うまでもない。朝鮮のことについても以上のようにあればよいと思うが、朝鮮の風潮は下々の者(末端の官吏)がとりわけ廉恥がなく、利を貪ると

ころがある。馳走（雑品支給）の一例を挙げても、朝鮮の朝廷や東萊府は別に意図がないのに、中間でその数量を減らし物品の質を落としている。だから当方で何も詰問しなければ、ついには事態がはなはだ深刻になるおそれがある。その時になっていざこざが起こる可能性も考えられるので、役人どもが右のごとく古式を踏まえ争うのも肯かれるが、かえてそれなりの訳もある。したがって、これから先、きつく問い詰めることは禁じますが、その他はまず今まで行ってきた通りにしておいてもよからうと考える。

日本人が覚え違いで、昔はそうでなかったのに（朝鮮が）だんだん支給する品物の質を落としていると誰もが口々に言ったりする。ついにそれが事実か事実でないかについては何をもって問い詰める根拠もなく、その内容も確かでない。だからこれを朝鮮に知らせ問い詰めることもできない。以前のことはどうしたらいいか道理もない。

これからは朝鮮の雑物支給が丁寧かそうでないかをもって交隣における誠信を尽くしているか不誠実に対しては知るすべがない。このことはまた、異国の事情を察する場合の一助となる。だから送使と僉官の記録に、接待の折に出される膳部の次第も詳しく記しておくようにとの意味で、宝永二年（1705）以後、朝鮮に渡海する者は各々記録を作成し、藩に提出するように言いつけた。この件に関して、この点を弁えない人は無用のことを言いつけるように考えるために、この趣旨を書き付けておくのである。

但し、送使と僉官として朝鮮に渡海する人は記録を作成せよとの指示に注意しないで、他人がこれまで記録してきた記録を対照して、自身の記録を作成している。（そんな訳で）日常の出来事でない特別なことを記録しておかねばならないことをむしろ記録していない。以前、（倭館の）西館に滞留していた者が火災に遭った時、東萊府から木綿を送ってきた。これは常にあることではないので記録しておかねばならないことであった。ところで、先規（これまでの規定）にそんなことはないとし記載しなかったために、後日、書き入れるように言いつけた。このようなことはこれからもありえることなので、送使と僉官が帰国する時、崇信庁の役人の中の一人に記録を吟味するように言いつけ、もし記録しておかねばならないことを記録しなかった場合、すぐさま書き込むよ

うに言いつけておくのがよからうと思う。

【注】

- ①朝鮮に派遣された使者や倭館に滞留する対馬の者に対し、朝鮮では彼らが滞留する間、毎日消費する費用を日供雑物と称して支給した。しかし、毎日、消費する品物を乾物として受け取る場合、5日分を集めて一度に支給した。したがって五日に一度ずつ受け取るということで、対馬では「五日次」と称し、朝鮮では「五日糧鏝」または「五日雑物」と称した。
- ②生鮮ではない乾魚物を支給した。
- ③「礼房」とは、朝鮮時代、承政院と地方の官庁に所属した六房(六典)の一つで、礼儀に関する事務を担当した。
- ④「戸房」とは、朝鮮時代、承政院と地方の官庁に各々所属した六房(六典)のひとつで、戸籍・租税・穀物などの戸曹に関連した事務を担当した。

39. 朝鮮と日本の「^{ます}升」の違い

朝鮮の一斗の容量を日本側が三升五合で計算するのは勘定所の帳簿上の比率で定められている。これは、この比率を決定した当時の支配^①が将来を見通して決定した良い考えだと思われる。今後は対馬の利益を託して眼前の小さな利益を図り、もし実際の数量どおり量るよう指示が下れば、実に大きな害をもたらすのみならず、その問題が両国に妥結しえないことになろう。したがって、もしそのような所見を述べる者があれば、叱責されねばならない。ましてこの点は、以前指示のあったことで『斛一件記録^②』の跋文にも記しておいたところである。

今、倭館内で多くの僉官をはじめ皆の者が朝鮮の「斗升」を使用するようになっている。三斗五合を一斗と称するのは60年間以来の計算上の比率であって、それが朝鮮斗升の実際数量ではないというのを人々が分からなくて、本来、朝鮮の「^{いっとう}一斗」が日本の「^{きょうます}京升」で三升五合に該当すると記憶している。

どんな品物であれ、日本人が朝鮮人から品物を受ける時、事情をよく分からない者は一斗の容量を「京升」で二升五合に相当すると計算しているが、どう

してそうなのか分からない。それで金属で作った金物^{かなもの}は対馬本国から持ってきて春亀竹右衛門^{かすがめたけ う えもん}③に指示し、新しい規定によって作られた東萊府の火印が刻まれた斗升をもらった。この斗升を複製し、これからは「京升」の使用を中止し、先の「斗升」をもって倭館にて取引するように支持しなければならないと対馬当局に報告し、そのようにするようにしたものである。

竹右衛門に指示し新しく作らせた訳は次ぎのとおりである。とにかく一斛^{いっこく}のほかに京升二升三合をさらに受けるのを朝鮮人たちは「加升」と言う。したがって一度は煩わしいことがあるはずである。その時は斗升を十五杯^{はひ}に量り受け取るしかない。ところで、昔、朝鮮で火印を押した代官方で用いる斗升は永く経ち破損がひどいので、朝鮮の通訳官と相談し、新規にしようと竹右衛門に話したところ、意外にも容易に完成した。後日、証拠のために以前使った古い斗升も大切に扱い代官側の倉庫に入れておくように言ったことがある。

【注】

- ①対馬藩庁で勘定所を責任官轄していた年寄級の藩士である「勘定支配」を自称するようである。
- ②長崎県厳原市に位置する長崎県立対馬歴史民俗資料館の宗家文庫には『斛一件覚書』（記録類朝鮮方B1）なる史料があるが、これを指すものと考えられる。
- ③『大古御馬廻奉公張』（対馬歴史民俗資料館宗家文庫）B2によると、48番目と49番目に各々春亀竹右衛門と春日亀竹右衛門（後、春日久右衛門と改名）が出てくる。両者とも日本語の発音はカスガメタケウエモンで同一であるが、各々別人を意味する。先の史料によれば、春亀竹右衛門（父）と春日亀竹右衛門（子）は父子関係にあったと言う。春亀なる文字の姓を使用する父、竹右衛門は、1691年（元禄4）から1733（享保18）の間に活躍し、1735年に朝鮮で死亡したことになる。春日亀なる文字を使用した息子の竹右衛門は、1718年（享保3）から1763年（宝暦13）にかけて主に活動し、1763年に死亡したと言う。両者とも対馬の藩士であった（以上は、韓日関係史学会編、国学資料院発行の訳注『交隣提醒』p.56参照）。

40. 倭館での宴享

宴享がある時は東萊府使と釜山僉使が揃って宴大庁に参席するのが古来からの礼式である。まして封進（進上）宴席は殿牌所^①にて朝鮮国王に対する肅拜^②があるので東萊府と釜山僉使が参席しなければならない。にもかかわらず、近頃ややもすれば、茶礼と上船宴の際、朝鮮側では釜山僉使一人が参席することで終えようとし、僉官たちも一方では早く終えようと急ぐためである。また、朝鮮側で支給する雑物などを下行（乾物）^③として受け取れば経済的に助けになるとの卑しい思いから、少ない利益にばかり心掛け、乾いたものを受け取って、ついには捨てようとする。このようにしては後日、東萊府は参席しなくなることありうる。したがって僉官たちに毎度点検し、東萊府使・釜山僉使が共に参席するようにし、礼式を綿密に詰めるように指示しなければならない。宴享がなく、止むを得ない場合には「床に拝すること」だけにし、下行で取引するのは中止するように措置を講じなければならない。

『捷解新語』^④を見れば、古館^⑤の時のことだと思われるが、「宴享が繰り広げられる時、東萊府使と釜山僉使が礼式どおり宴席に参席したが、ちょうど日本側の正官などが病気を理由に宴席に出席できないと言った。すると、訳官たちがいろいろと説きつつ論してはなだめた」との句節が見える。

その時までは、日本人が何とかして朝鮮人に無理強いするのがまるで自分たちの功を立てるかのように考えていた様子であったため、いくらでもこんなことがあったと思われる。ところが近頃になり、東萊府使が宴饗に参席しなくなったので、実際は日本側に申し入れた癖がとて多いようで気の毒なことである。

【注】

- ①「殿牌」とは、王を象徴する木牌。「殿」の字を記して地方の官吏の客舎に納めて元旦や王の誕生日に拝礼した。
- ②「肅拜」とは、慎んで拝礼すること。
- ③「下行」の語が2箇所見られる。東大所蔵本には「下行」とはせず、「乾物」と記されている。なぜ「下行」が「乾物」と置き換えられているのか不明である。

- ④日本語の学習書。十卷十二冊。文禄の役の時、日本に拉致され10年ぶりに釈放された朝鮮時代の訳官康遇聖^{カンウソン}が編纂したものを1627年に訳官崔鶴齡^{チエハクリョン}が校正して刊行した。後、1676年に重刊。日本語を平仮名で記録しハングルでの読み方と意味を付した。
- ⑤1678年以前の豆毛浦倭館を指す。

41. 僉官の名代（代理人）問題

僉官自身が直接朝鮮に行かないで名代^{みようだい}①を派遣するのは、以前、一旦禁じられたものであるが、近年になり、当然、代理人を送ってほしいとの請願があり許諾している。このようなことも対馬に一定の法式がなくて生じることなので気の毒なことである。

【注】

- ①代理人のこと。

42. 周急と救質に対する書簡の文句

周急^{しゅうきゅう}①とか救災②と言って、対馬の国が困った時、朝鮮から米を贈るとの書簡の文句は、朝鮮から人情を施し米を贈るかのように見えるが、実際は対馬藩の意思を事前に要請し、そのようになったものである。憐れに思い、救済してくれるように異国に要請するのは誠に恥ずかしいことである。三十年前③にはそのようなことは少しもなかった。これからは再びそのようなことがないようにしなければならない。

【注】

- ①「周急」とは、急迫した事情に陥った人を救済すること。
- ②「救災」とは、災難から救い出すこと。なお、東大所蔵本では救災を「救質」と記す。
- ③本資料には「三十年来」と記す。1700年頃のことか？

43. 「礼儀の国」の意味

朝鮮を「礼儀の国」だと呼ぶのは、他の夷狄^{いてき}はややもすれば中国に背^{そむ}くところ、朝鮮は代々藩王の格を忘却しなかったため、事大の礼儀が正しいとの意味で「礼儀の国」だとのことであって、事ごとに礼儀に適った国と言う意味ではない。したがって、朝鮮人が壁に唾を吐き、人の面前で溺器^{しびん}①(尿瓶)を使うのを見て礼儀の国に似合わないというのは「礼儀の国」という本意をよく理解できていないことである。

勿論、朝鮮は古式を考へ中華の礼法を行なうので、他の夷狄より秀れ、日本人が速やかに考へ及ばないことも多い。文盲な人を朝鮮ではかえって可笑しく思うほどであるから、(日本としては)まことに恥ずかしいことである。このようなことにも注意しなければならない。

【注】

- ①「溺器^{ニョウキ}」の「溺」は、小便または小便をすること。したがって「溺器」とは「尿瓶」のこと。

44. 公作米の未収

日本人が朝鮮から米を買うことについて言えば、三十年前から二十余年間、積もった未収が二百俵あまりに及び、解決法が見えない。その間に代官が未収をうまく取り立ててご褒美^{ほうび}をもらったこともあるが、反対に、未収が思い通りに収まらず、事が首尾よく行なわれない場合もあった。

とにかく未収の数量が減らないので、未収本前の区別なく正月から十二月まで倭館内に入ってくる米の量を十か年に亘り一年に何回ずつ入ってくるのか調べるよう会計勘定所に指示し、計算したことがあった。そうしたところ、十年間どの年であれ、だいたい一万六千俵以内で、一万六千俵以上になる年は一度もなかった。だから未収だと言って請けとったのは本前をそれだけ減らして受け取ったのであり、本前として受け取ったのは未収米というのがそれだけ入ってこないのである。むこう(朝鮮)ではいつも一万六千俵を未収米の名目で持つ

てくるか、本前米と言って持ってくるものに過ぎないのであった。当方(対馬)は、これが分からず朝鮮人たちに侮弄(ぶろう)されたまま朝三暮四のうちに年月を経てきたのである。商売をしてもこのような心持がなければならない。

元来、右で述べた三十年前から日本が丁丑年(1697)、だから今から三十三年前、朝鮮国に大飢饉が発生した頃より始まった。米の買い米を中止し、昔のように木綿を入れるよう都から指示が下り、各官が木綿を東萊府に納めるようになるにつれ、日本にも(米の代わり)木綿で入れようとしたのであった。しかし、日本人がこれを受け入れなくなるや、その内訳を都に報告し、翌年の戊寅年(1698)、以前同様、米で入れるが、前年度の丁丑年分も米で入れてくれるよう指示があった。そうして丁寅年、各官より東萊府の倉庫に入れてきた木綿を、その後、京商(ソウル商人)の安錫微(アンソクミ)という人が引き請け、米に替えて、倭館に入れるよう東萊府から指示があった。ところが、この安錫微なる人が過ちを犯し、丁丑一年分の米が入らなくなり、その時からだんだん未収が生じることになった。右で述べた丁丑年の飢饉のせいで、木綿を各官より納めさせられたところから不条理が生じ、未収が発生するに至ったことについては当時の朴僉知がすでに日本人に語ったことがある。ところで、朝鮮人が言ったことだと言って、事実か否か疑わしい人もいるが、三十年来、朝鮮の文書に見える前後事情を深く考えてみると、やはり朴僉知の話が事実であった。

朝鮮人が言う話は元来虚偽が多いと言うが、その人と事案および情勢をよく考え、判断しなければ、その真実なことを虚偽と考え、虚偽なことを真実と考えることになり、虚偽を真実と判断することになり得るので、この点がとても重要である。

三十年前からの積もった未収は瀧六郎右衛門の裁判があった時、東萊府に直接話し、一旦は皆回収されたが、近来再び未収が生じている。注意しなければならないことである。

45. 公木から公作米へ

木綿四百束^①を米に替えれば公作米一万六千俵^②になる。かなり昔には、対

馬藩が持ってきた看品(輸出品のこと)の代価として朝鮮から支給される千百束(5万5千匹)の木綿を皆八升木の長さ四十尺でもらい受けた。ところが、その後しだいに木綿の質が悪くなり、五升木三十五尺で支給された。すると対馬藩はその中で良質のものだけを選んで受け取り、質の良くない物は受領を拒んだが、それを「点退」^③と称した。そのため両国間に争いが絶えず、朝鮮側では困難を来たしている。天啓甲子(1624)の時には、朝鮮の木花^④の出来がよくなくて、良質の木綿の調達が行なわれなかった。それで朝鮮側は何とか「五升木三十五尺」相当の木綿を代官方で請け取ってくれば再び木花の作柄のよくなるのを待ち、前々どおり木綿で送り渡すとの内容の書簡を朝鮮側に送り、事情を訴えたことがある。^⑤

その時ちょうど、千百束余りの木綿のうち、四百束を米に替えたかどうか、との相談が始まり、その話のとおり米に替えてくれれば残りは朝鮮側が「五升木三十五尺」相当分を支給しても日本側が受領拒否をいたしませんので便利なことだと悦び、朝鮮側は(米で支給する方案を)受け入れるものと思われる。

その時節までは、文禄・慶長の役の余勢があつて、日本の威勢が強く、また朝鮮側には日本への恐れも強く残っていた時分であつた。それで日本人たちが右のように木綿の質を巡って目を怒らし、顔を赤らめ、大声をあげ、訳官たちを叱責するのを、朝鮮側の記録には「大肆咆哮」^{だいしほうこう}と書き記されている。「咆哮」とは、虎が吠えることを指すが、この文字で日本人の怒りの姿を言い表すのは畜生に喩えた悪口言葉であるが、その時までは、朝鮮人は日本人が虎のごとく恐ろしいものと考えていたことをこの文字表現で知ることができる。そのような時勢であつたので、日本側は四百束の木綿^⑥の代わりに悪木^⑦を受け取ることができたし、煩わしいことも皆なくなったと悦んだ次第である。

それから既に六十八、九年が過ぎ今では、朝鮮人が乱(「文禄・慶長の役」)後の日本の余勢もなく、日本人は年々柔弱になり、朝鮮の恐怖心もしだいになくなっている。その上、二、三十年以来は「五升木三十五尺」のうちに、一般市場で取引される価布^{かふ}のような品質の木綿を取り入れても、以前に咆哮した様子も消え失せ、少し互いに争つても結局は(対馬藩)がそれを請けとってしまうようになった。

朝鮮の現在の考えは、公作米を中断して、千百束余りの木綿で復回し、「五升木三十五尺」の木綿で決済されれば、と考えているであろう。特に、対馬藩がもたらす看品^{かんぽん}®のうち、銅、錫、胡椒、丹木などが国家財政に何らの利益にならないばかりか、価格にしてもそのような価格で持ってくるのは私貿易の価格よりも十倍も高価で、朝鮮側が大損であると考えていることが朝鮮側の書き物に書き付けられている。だから、従来の看品も中止したいところで、まして木綿を米に替えたのはなお一層気の毒に思われるはずである。だから一度はこの問題に煩わしいことがあろうと思われるが、後日のことを考えれば真に寒心に耐えないことである。

これまでは年限が尽きれば（日本側が）裁判を（朝鮮に）送り決定された。ところで（朝鮮側は）初めは米での支給はできない、と返答したが、その後になって再び五年と年限を定め、許諾した。米の支給を中段するとの最初の話しは口癖のように見えますが、（朝鮮側は）間違いなく中止したいと言うであろう。とは言え、まずは訳官たちが中間でうまく取り扱ってくれており別段問題なく（米の支給が）続いていくと思われる。けれども将来、訳官たちがその間、心を込めて取り扱ってくれたことを途中で止めるとか、また分別のない人がいるとか、朝廷側にぜひとも中止せねばならないとの議論を強硬派が登場する時は心もとないことなので、朝鮮側と実務交渉する人は常に心掛けておかねばならない。

【注】

- ①朝鮮の当時の規準では、木綿、麻などは一同（同は単位）は50匹。したがって木綿400束は400同と同じで2,000匹に該当する。
- ②木綿1匹に対する米の交換比率が12斗であったので、朝鮮の米1俵は官衙^{かんが}（役所のこと）で用いる小斛^{しょうこく}平石の場合、せいぜい15斗であったところから、 $2,000\text{万匹} \times 12\text{斗} \div 15\text{斗} = 1\text{万}6,000\text{俵}$ となる計算が成り立つ。
- ③「点退」とは、朝鮮語で「受けた品物を点検し、気に入らなければ元に戻すこと」の意で、朝鮮の資料ではしばしば用いる語である。
- ④「木花」とは、工芸作物として育てる一年草の植物。高さ60cm前後で、葉は交互に入り混ざり手の平のような長い葉柄がある。秋には黄色または紅白色

の五葉花が咲き綿のような丸い実がなる。熟して乾くと分かれて白い綿毛がでる。種は油を絞り、綿毛は木綿糸の原料となる。

- ⑤この問題に関連して、朝鮮側が対馬に送った外交文書、即ち「書契」が現在、国史編纂委員会に保管されている。書契121号、122号、128号などを参照。
- ⑥東大所蔵本では、「四百束之本綿」の「木綿」の次に「米」が挿入されている。
- ⑦東大所蔵本では、「悪木」とせず、「惣木綿之」と記す。また、本資料では、「悪木」の右横に「二字二考」のルビが、また、左横には「白米之二字」のルビが付されているが、「二字二考」の語頭の1字および「白米之二字」の語末の1字は解説が不明。
- ⑧「看品」とは、品質がどうなのかを品定めすること。

46. 公作米の支給年限

日本が朝鮮から米を買い求める年限が明らかに裁判水準で定められたのは、白水李兵衛が裁判に任命され朝鮮に渡った頃から始まった。最初に米の売買がなされた時からだんだんと年限が定められたことを知らない人が多いが、なるほどこちらの古記録にそのような内容が見える。だとすれば、毎年の年限があったことは間違いない。特に、李兵衛が朝鮮に派遣された時に至ってはなおのこと、年限がなかったとは主張しがたい。詳細は実録^①に見えるので省略する。

【注】

- ①『天龍院公実録』を指しているものと思われるが、宗義智^{よしとし}から義成^{よしなり}に続く宗義真^{よしざね}は1655年(明暦元)から1702年(元禄15)まで在任し、その後を義倫^{よしつぐ}が継いだ。

47. 漂流民の接待

対馬の船が慶尚左右道に漂流する場合、昔は朝鮮側が接待をどの程度してくれたのか定められた格式がなかった。事情を知るために釜山に派遣された別差^{べさ}^①の指示に従い支給する数量の多寡が定められた。そんな中、訳官たちの要

求で別差が事情を調べに参ることが中止された。このため漂流地で日本側の水夫たちが接待を要求する場合、漂流地の官吏の指示を伝えてくれる人もいないので、船員たちが要求するままに雑物が支給されるようになった。これに、船員たちはしだいにその量を増やして要求するようになったし、二、三年後には、その量が相当な数値に至るようになった。したがって、この問題を朝鮮側の任訳^②たちが館守にたびたび訴えた。

時あたかも味木弥三郎^{あじき やさぶろう}が釜山近くに漂着したが、（この時）日本側の船員たちが接待を要求するに至り、漂着地で支給したのが気に入らないとのことで、彼らが萬戸^③を棒で叩くことが起こった。これに朝鮮側の軍官が皆走り寄り船員たちを叩きのめしたが、そのうちの船員たちの中で九死に一生を得た人もいた。この時丁度、杉村采女^{すぎむらうねめ}が参判使として朝鮮に渡っており、この事件の次第を聞き届けていた。そうしてついに、任訳と館守が相談し、漂流民の接待に対する格式が定められ、格式が記された本を1冊ずつ船頭にやり、今後は定められた分量以上は受け取らないように指示した。最近二、三年間、漂流することになれば、接待の品を過分に取り、経済的に有益となった。これに、年中一、二隻程度を除いては、直ちに釜山の倭館まで航海する船がなくなったし、皆わざと漂流したようにした。接待は船員たちだけが請けとったのではなく、同じ船に乗っている侍たちももらったので、意外にも多くの米をもらって収入とした。ところで誰もが接待されたとは対馬側に報告しなかった。そんな筈はないと言って、二、三年間措置しただけなのに、ようやく参判使^④が釜山の倭館に来たときになってはじめて改革された。

今後また妄り^{みだ}に漂流民が多くなれば、対馬藩では神経を使い、弊端が生じる原因を調べ迅速に処置せねばならないであろう。

【注】

- ①主として通訳の任に当たった役人を訓導と称したが、別差^{べるさ}はその訓導の下に属した釜山にあった倭館駐在の日本語通訳人のこと。訓導別差を略称して訓別^{べる}とも称した。日本人が慶尚道海岸の浦口に漂着すれば、漂着地の連絡を受け、釜山鎮で別差（日本語通訳官）が派遣されて、漂流の経緯などを問う調査、即ち問情が行なわれた。

- ②任訳とは、訓導と別差を通称する語。
- ③朝鮮水軍の武官職を指す。
- ④対馬から日本に派遣した使節には定期的な年例八送使と臨時に派遣する使節としての差倭があった。差倭はまた大差倭と小差倭に分けられるが、この中、大差倭を参判使と言った。彼らは幕府將軍のことや通信使に関することで朝鮮に派遣された使節であったが、礼曹参判前に送る書契(文字を記した約束の手形)を持参していたことから由来し、彼らを指して参判使と称した。

48. 日本人の倭館外への出入制限

日本人の漂流者が、ある時は監守が多太浦または牛岩浦^①に出掛けたり、彼岸^②に合わせて倭館内の人々が古館に行くこと、遠見ができる遠見嶽に日本人が上ること、このようなことなどは朝鮮人が好まないことであるが、日本人の足首を捕まえられることがあっては困るので、どこまでも古式どおりにしなければならない。また倭館内の広い空き地を替えて朝鮮に戻してほしいとの相談がややもすれば(朝鮮の)訳官の間で出ている。これは決して許してはならない。その訳は実録^③に詳しいので省略する。

【注】

- ①多太浦と牛岩浦は釜山近辺の浦(入り江)。
- ②春分に行なう仏教行事。
- ③『天龍院公実録』を指す。

49. 交奸に対する朝鮮と日本の処罰の違い

朝鮮人が嫌がることを行い、日本人の不埒を改めなければ、結局は日本人に難儀なことになろう。そんなことも心得ておかねばならない。

朝鮮側では公奸を深く禁じているのに、倭館の人々がその法を守らず、初めは倭館の近くにある民家をことごとく撤去し一ヶ所に遷した、しかしその後、呼崎^{よびさき}の石垣が堅固でない所を通じて女を呼び入れた事実が知れるところとな

り、朝鮮では石垣を築くと言ったが、倭主税^{たわら ちから}①が館守に在職している時、多くの人夫に石を運ばせた。

ところでその時ちょうど、参判使が在留している時なので、しないように指示したことがあった。すると、呼崎に石垣を築くことを中止し、その代わりに遙か三方に石垣を築き「坂の下」②に新しい門を建てることになり、倭館内に朝鮮人が出入りすることが不自由になった。

その後、白水源七^{しらみずげんしち}の交奸事件が再び起こるや、坂の下の民家を全て取り払い、訓導の居所だけ残された。それでいずれも館内の勤務者にはさらによくないことになった。

一体、一時の不便なことだけを図り、後日を考えないことが日本人の慣わしなので、当時は穏便にし、後日の便利を取る朝鮮側の深い計らいと比較すれば、知恵と思慮の優劣は明らかである。

かねがね交奸の禁止を厳密にしてきたのであれば、民家を撤去することはなかったはずであろうに、そうでなかったのが、結局、今になって倭館に人としての倫理が絶えることとなり、倭館が衰微することになった一端となった。

【注】

- ①「主税^{ちから}」とは、税に関した事項を扱った者の官職。
②朝鮮の訳官が居住していた「坂の下」を指すが、ここには日本人の出入りが統制された。

50. 日本側が東萊府を交渉相手にする時の留意事項

東萊府に入るのを東萊府と命を懸けて闘うことも考え、または生きては戻れないことのようにも考え、東萊府に入れば必ず結末をつけねばならないようにも考える。これは誤った考えである。事の次第によっては相違があろうが、宴席に山積した場では詳細な内容を述べにくく、また訳官を送って伝えれば意味を正確に伝達しにくい場合が多い。このため、とにかく東萊府に行き、直接対面して詳しく話し合わねばならない場合が必ずあるものである。その時は事前に知らせて東萊府に入らねばならない。

日本側の例を挙げて言うならば、田代^{たしろ}①の役人が柳川^{やながわ}②や久留米^{くさるめ}に③行き、かの地の役人と対談するようなものである。したがって、面談を通じてその事をすっきり結末をつける場合もあろうし、そのようにならない場合もあるはずである。東萊府にさえ行けば、何事であれ決着がつくと考えることでもなく、妄^{みだ}りに言い争うこともよくない。その境界を越えてあちら(朝鮮)に行くのは元来、容易になりがたいことである。したがって、東萊府と面談をしなければならないほどではないのに、東萊府に行くことになれば、訳官たちが難儀であろうと思ったあまり、訳官に痛手をあたえ、そのことを処理するとの画策をもって東萊に入るのは誤った考えである。

【注】

- ①当時、対馬藩の領地として、現在の佐賀県鳥栖市^{とすし}の一部地域に該当する。
- ②福岡県南西部の一地域。
- ③福岡県南西部の一地域。

51. 倭館内で発生した犯罪の処理

倭館内に朝鮮人が品物を盗むために入った場合、館守がこれをためらわず死罪に処してくれるように毎度訳官に話している。けれどもそのとおり執行されず、話しておいてもそのままになる場合がある。元来、品物を盗むのにも軽重があるものであるが、その区別をしないで(朝鮮側に)必ず死罪にしてくれと言うのはこちら(対馬藩)からの無理な要求である。交奸を犯した者の場合、朝鮮ではこれを死罪としているが、こちらでは永久流罪に処するのと同じで、国ごとに法式があるものである。そんな訳で、今後は盗賊を捕えれば縄で縛り、訳官に渡し、館守は盗みの軽重にしたがい、朝鮮の国法に準じて処置してくれるよう朝鮮に話しておかねばならない。

朝鮮国内で盗みを犯す者は、その罪を取り調べ、明らかにし、倭館内で盗みを犯す者を容赦するのは決してありえないことである。万一、訳官たちが個人的な利益を謀ろうとすれば、ことが難儀になろうが、東萊府が以上の人々の耳に入ったからには、そのまま放置されはしまいか、との気遣いは、かつてはな

かったことである。

52. 朝鮮人の取扱いに対する教訓

私、東五郎が二十二歳の時、対馬藩に奉公に召し抱えられて江戸にいる頃、在勤の者たちが話すには、朝鮮人くらい鈍い者はいない、と言った。(朝鮮人の中には)炭唐人と言って(倭館に)炭を持ってくる者がいたが、もし炭を持ってこなくて手に印を押してやり、明日持ってくるように言いつければ、翌日には必ず炭を持ってきて、手に刻まれた印を消してくれと言う。人が多いこともあろうが、誰だとも覚えていることでもないのに、手に押された印を自分自身で洗い落としてもいいはずなのに、必ずこんなふうに洗い落としてくれと言うので、おかしいことだと言っていた。

この話を聞いて、私、東五郎が考えるに、(朝鮮人が)愚鈍である筈がない。おそらく当時は、倭乱後(日本の)余勢が強くそうであったと考えていた。その後、(東五郎が)三十六歳の時、朝鮮語の学習として朝鮮に渡海した折、ある日、町代官の中で、昔の慣行を覚えている者がいた。彼は、炭唐人が炭を持ってこないと叱り、上着の袖を縄で括ろうとした。すると、右の朝鮮人がひどく怒った。横には金別将という訓導の手下の書記がいたが、この者がまた目を赤らめて怒っては、「わが国(朝鮮)の人を侮辱するとは、一体どういうことなんだ」と散々に叱責した。これに、町代官が恐れおののき止めたことがあった。この一件だけを見ても、わずか十四、五年の間に雰囲気がこんなに変わってしまったのである。

大概、壬辰倭乱(文禄の役)後、萬松院様^①御一代から光雲院様代^②御幼年までは(朝鮮人が)日本の余勢を恐れた。光雲院様代中頃から天龍院様代^③の初年までは日本人を避けた。(ところで)天龍院様中頃より以後は、すでに日本人に(朝鮮人たちが)狎れてきた。恐れ避ける時は、むこう(朝鮮)が低姿勢になり、狎れてきたら強者が高姿勢になり、弱者が低姿勢になりがちである。天龍院様の在位の中頃まではまだ狎れて間もない頃であったが、近頃はとても狎れてきたので、今後は「乗之凌之^④(これに乗ってこれを凌ぐ)」と言って、

威厳が朝鮮側に移り、こちらはかえって卑屈になったと言わねばならない時勢になった。だから、公明正大を心に刻み、理義（道理と道義）をもって務め、（物事の）前後を計り、事に当たらねばならない。「不畏強御禦不侮鰥寡剛亦不吐柔亦不茹」^{あなど}（強者に怖れず、弱者を侮らず、困難に不平を抱かず、容易だと言ってはわざと挑むな）というのは処世術の秘訣を教える言葉であるが、朝鮮との交隣の際にはこのような心構えが最も重要なことだと言えよう。

【注】

- ①第19代宗義智在任（1579～1615）の頃を指す。
- ②第20代宗義成在任（1615～1657）の頃を指す。
- ③第21代宗義真在任（1657～1692）の頃を指す。
- ④本資料では、「乗之凌之」の4字は漢文調で記されているが、東大所蔵本では「乗之陵之」と表記されている。「陵」は「凌」の誤りであろう。また、東大所蔵本では、太字4字の前には「^{ナル}狃る事の浅二候所、今日ニ至り候而ハ^{ナル}狃ること深く成り候間、此後ハ」の語句が挿入されている。
- ⑤本資料では、「不畏強御禦不侮鰥寡剛亦不吐柔亦不茹」の17字は漢文調で記されている。

53. 東萊府使の地位

古館の最初の頃^①には（朝鮮の）訳官たちに話す時、東萊府使は裁判と同等だと主張する人々がいたが、これは不敬（無礼）と言うべきである。文盲とも言うべきである。大体その時は壬辰倭乱以後の状況が続いていた。それで館守に送った年寄の書状にたまたま東萊府使に関係することに出合うと、大部分は（裁判が）東萊府使と相対したように読まれて、訳官たちに対してはまるで出入りする町人たちに対するように挨拶をし、（裁判が）あまりにも尊大された。ところでこれは過ぎたることである。

その後、竹島のことが起こった時、朝鮮の意見はどうか、隣交とその他の諸事の異変がないのか、と人々が危懼心を持つようになった。その時から東萊府使を特別に崇めたところ、東萊府使は三品の人なので対馬藩主よりも高い

地位にいることを知るようになった。ところで、これを意外なことのよう
 思わ^{なかば}ないで、むしろ半主人に仕えるように言う人もいた。

「対馬藩主はその他の人民を治めてきた侯伯の資格を持つ身であるが、どうして東萊府使と比較できようか」と言っても、これを心に刻まないのは正しくない。元来、義理に適うように事を処理しなければ、そちら(朝鮮)は傲慢になり、その勢いを我が方(日本)が怖れ卑屈になるものであり、あちらが卑屈になれば、その弱点を軽蔑し、こちらが傲慢になるものである。これは、人情の常弊であるから、あちらがどう出てこようとも我々はその權威が乱れぬようにしなければならない。

韓同知^{ハン}の船が破船した時、ひたすら裁判が分からなかったので、このこと(裁判の怠慢)を必ず言ってくれ、と訳官たちに話した。「情難測」^②(情意が分からないようだった)なので、とにかく嚴重に叱責しなくては朝鮮の思いがよくないことであるし、館内からも言ってきている。対馬でも以前から話しに上っていることであるので、(一方では、裁判を処罰するのが)異国に媚^{こび}を売^うるものだと^の所見も多かった。そうして『春秋左伝』にあるように、「寧以国屍不可從也」^③(むしろ国が滅びようとも従うことができない)という語を引用して、こちら(対馬)では、「海上では風が強く波濤が荒いため、父子の間でも咫^{せき}尺^④を隔てても互いに救い出すことができない。それで、この度、韓同知が破船に遭った時も、裁判はこのことが分からなかった。もし、裁判を罰さなければ隣交が断絶される、と主張しても、『左伝』^⑤の話しのように、それは決して許容できないことであるから、この意味を訳官たちに必ず伝えなければならない」と話した。

その後は騒ぎ立てる浮言もだんだんなくなった。すべてのことはこのような心構えでなければならない。とにかく「以義自守候時ハ猥ニ躁惑畏縮」^⑥(正しい義をもって自らを守る時は妄^{みだ}りに躁惑したり萎縮することはなくなる)はずである。

[注]

①1678年、草梁倭館に移る前の豆毛浦倭館の頃を指す。

②本資料では、「情難測」の3字は漢文調で記されている。

- ③本資料では、「寧以国屍不可従也」の8字は漢文調で記されている。
- ④「咫尺」とは、近い距離を表す。咫は周尺で8寸、尺は一尺を表す。
- ⑤『左伝』とは、『春秋左氏伝』の略称。
- ⑥本資料では、「以義自守候時ハ猥ニ躁惑畏縮」13字は漢文調で記されている。

54. 誠信の交わりの真の意味

多くの人々が誠信で交流するというが、この言葉の意味を明白に分かっていない場合が多い。誠信というのは、実意という意味をもっており、互いに「不欺不爭」^{あざ}①（欺かず、争わず）、真実をもって交際することを誠実というのである。

朝鮮と真の誠信の交わりを行なうためには、送使を全て辞退させ、少しもかの国（朝鮮）の煩わしさにならないようにしなければならない。そうでなくては真の誠信とは言いがたい。朝鮮の書籍を見れば、その底意を知ることができる。

しかし、この問題は言葉のように容易ではない。今まで言われてきたことを見ても、朝鮮としてもた易く改められるところではない。したがって慣例はまずそのままにし、さらにその上に、実意を失わないようにしなければならない。「日本人其性獷悍難以義屈」^{きょうかん}②（日本人は、その性質が狂悍であり、義でもって屈服させることは難しい）と申叔舟^{シンスクサユ}③の文にも記されている。その国の弊害が余程であるにもかかわらず、送使の接待をはじめ、今まで別段問題なく引き続いているのは（日本人の）^{こうかん}獷悍の性質が（朝鮮人に）怖れられていることに起因している。

乱（「文禄・慶長の役」）後、日本の武力を前面にした余勢は今になって甚だ薄くなり、今後、対馬の人々が従前の武義を失い、学習を怠り怠惰の心になれば、必ず先に述べたとおり、何がしの木刀^{はくとう}というごとく、事態は流れていくはずである。したがって朝鮮との業務を担う幹事はそのような心構えが肝要と言えよう。

とにかく朝鮮の事情を詳しく知らずしては、事に臨み決断を下すことはでき

ず、浮言雑説だけが乱舞し、何らの利益にもなりえない。だから、『経国大典』^④『故事撮要』^⑤などの書物と阿比留惣兵衛^{あびるそうべい}が編集した『善隣通交』、松浦儀右衛門が編集した『通交大紀』^⑥および『分類記事』『記事大綱』^⑦を常に熟覧し、前後を^{わきま}弁え処置しなければならない。

享保十三年戊申^⑤十二月二十日

雨森東五郎

【注】

- ①本資料では、「不欺不爭」の4字は漢文調で記されている。
- ②本資料では、「日本人其性獷悍難以義屈」の11字は漢文調で記されている。
- ③申叔舟^{シンスクチュ}（1417～1475）は朝鮮時代の学者・文臣。1438年に科挙に合格。1441年、集賢殿副修撰となる。1443年、通信使の書状官となり日本に赴き詩作で名をとどろかし、帰国の途中、対馬島に立ち寄り葵亥約條を結んだ。のち、中国音韻学に関する知識を修得し、朝鮮王朝第4代世宗王^{セ・ジョン}を助け、成三問^{ソンサンムン}とともに「訓民正音」創製に多大な功績を残した。その後、数々の要職に就き王に仕えた。優れた学識と文才で『世祖実録』などの書籍を撰修した。
- ④『経国大典』は朝鮮時代の基本法典として、朝鮮の政治・経済・社会・文化の全般を理解する際の必須史料であるばかりか、その後に編纂された『続大典』、『大典通編』、『大典会通』などの基本文献となった。
- ⑤『故事撮要』は魚叔権^{イースクワン}が1554年に著した書物。その後、何度かに亘り編纂と改修がなされた。『故事撮要』に現れる日本関係の記事は朝鮮初期に確立された日本との交隣体制が16世紀中頃以降、どのように変遷したかを示す貴重な史料である。
- ⑥田中健夫氏と田代和生氏共著によって、この史料が『朝鮮通交大紀』（名著出版、1978）として刊行された。
- ⑦韓国の国立中央図書館所蔵の『交隣提醒』には、「分類記紀事大綱」となっている。また、日本の旧厳原町中央公民館所蔵本には、「分類記事大綱」となっており、国史編纂委員会所蔵本と東京大学史料編纂所の所蔵本には、「分類記事大綱」となっている。おそらくこれは、『分類記事大綱』を指すようである。対馬藩主のいわゆる「対馬宗家文書」中には朝鮮と日本（特に、対

馬）との間の貴重な事件や外交・貿易などについて整理し、『分類記事大綱』という書籍に編まれた史料がある。他の対馬宗家文書と同様、『分類記事大綱』は対馬の対馬歴史民俗資料館をはじめ、日本の国立国会図書館と韓国の国史編纂委員会など、多くの機関に分散し、所蔵されている。

〔参考文献〕

- 1) 『国訳増正交隣志』（財団法人（韓国）民族文化推進会編・発行人、1998年2月）
- 2) 『訳注「交隣提醒」』（国学資料院、韓日関係史学会編、2001年2月）
- 3) 『芳洲外交関係資料書論集 雨森芳洲全書三』（関西大学出版部、昭和57年6月）
- 4) 『朝鮮通信史——善隣と友好のみのり』（上田正昭編、明石書店、1995年2月）
- 5) 『増正新国史辞典』（李弘植博士編、1983年3月）
- 6) 『日韓のかけ橋雨森芳洲』（呉満著、新風書房、2004年11月）
- 7) 呉満著「雨森芳洲著『交隣提醒』について——その1（『大阪経済法科大学論集』第90号、大阪経済法科大学経法学会、2006年2月）
- 8) 呉満著「雨森芳洲著『交隣提醒』（韓国立国史編纂委員会所蔵本）について——その2（『大阪経済法科大学論集』第92号、大阪経済法科大学経法学会、2007年2月）

